



文化財愛護  
シンボルマーク

北条町埋蔵文化財報告書17

Hōjō  
鳥取県東伯郡北条町



曲第1遺跡発掘調査報告書  
Magari Oka  
(曲岡遺跡) 第1集

1995. 3

北条町教育委員会



Hōjō  
鳥取県東伯郡北条町

曲第1遺跡発掘調査報告書  
Magari Oka  
(曲岡遺跡) 第1集

1995. 3

北条町教育委員会

## 序 文

北条町は、原始・古代より文化の栄えた地域で、総面積20.99km<sup>2</sup>程の小さな町にもかかわらず、遺跡の分布密度は県下第一と言われています。

特に、縄文時代前期から晩期にかけての大量の土器・石器が出土し、「本県の縄文文化で最も豊富な資料を出し、かつ編年のための最も重要な役割をしている。」と評される島遺跡をはじめ、270基以上の古墳を数える土下古墳群。この中にあって、全国でも希有な「鹿の子文」をもつ人物埴輪、帽子をかぶっていると考えられる人物埴輪、「斜格子文」をもつ人物埴輪を出土した土下210号墳は全国的にも注目を集めた古墳であります。その他に、225基以上の古墳を数える曲古墳群など、著名な遺跡は枚挙に暇がないほどです。

ここに報告する曲第1遺跡（曲岡遺跡）は、北条町教育委員会が平成6年度に実施した県営北条西2期地区農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財調査であります。

この計画地内からは、遺構としては、古墳時代後期の堅穴住居跡や段状遺構などが発見されました。また、遺物としては弥生土器・土師器・須恵器など多量の土器類が出土し、今回の発掘調査によって曲地区的山裾部に営まれた古代文化の一端を知ることができました。

残念ながら、遺跡は記録を残すだけとなりましたが、これら記録や掘り出された出土品が整理され貴重な文化財として私達郷土の歴史を知り、愛する一助となれば幸甚と存じます。

なお、調査にあたり、調査員の方々をはじめ、調査関係者の皆様には、幾多の困難を克服し、本調査が終了したことによく感謝申し上げます。

また、平成6年8月22日、猛暑。業半ばにして逝去された友定美保子調査員には、紙面をかりて氏に深甚なる謝意を表わすとともに、御冥福をお祈り申し上げます。

平成7年3月

北条町教育委員会

教育長 井 上 浩

## 例　　言

1. 本報告書は、平成6年度に、鳥取県倉吉地方農林振興局の委託を受けて、北条町教育委員会が主体となって実施した北条町曲字「岡」地区の埋蔵文化財発掘調査記録である。

2. 調査体制は以下の通りである。

調査団長 井上 浩（北条町教育委員会教育長）

調査指導 長岡充展（鳥取県埋蔵文化財センター）

調査員 松本達之、宇田川 宏、西村勝義、日置条左エ門、前田明範（以上北条町文化財保護委員）

友定美保子

樋口和夫（北条町教育委員会教育課社会教育係係長兼社会教育主事）

事務担当 樋口和夫

調査協力 松本 哲・井上三千代・川本美佐子・福田寛子

3. 本書の執筆、編集は樋口が行った。

4. 遺構の実測、図面作成、写真撮影は調査員及び中原由香里、福田香織が、遺物の実測・遺構図、土器の浄書は松本・井上・川本・福田が行なった。

5. 本書に使用した方位は全て磁北を示す。

6. 図面、写真、出土遺物等は北条町教育委員会が保管している。

# 目 次

序 文

例 言

目 次

挿図目次、挿表目次、観察表目次、図版目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の結果	4
第1節 調査の概要	4
第2節 B区・C区の調査	4
第4章 まとめ	23
第5章 おわりに	28

# 挿 図 目 次

挿図1 曲第1遺跡（曲岡遺跡）位置図	1
挿図2 北条町遺跡分布図	2
挿図3 B区全体遺構図	5-6
挿図4 D区遺構図	7
挿図5 SI-01遺構図	8
挿図6 SI-03遺構図	9
挿図7 SS-01・02・03遺構図	10
挿図8 SS-04・05遺構図	11
挿図9 SD-01遺構図	12
挿図10 SK-01遺構図	12
挿図11 C区ピット群遺構図	13
挿図12 出土土器実測図（その1）	14
挿図13 出土土器実測図（その2）	15
挿図14 出土土器実測図（その3）	16
挿図15 出土土器実測図（その4）	17
挿図16 出土土器実測図（その5）	18
挿図17 出土土器実測図（その6）	19
挿図18 出土土器実測図（その7）	20
挿図19 出土土器実測図（その8）	21
挿図20 出土土器・石製品実測図（その9）	22

## 挿表目次

挿表 1 北条町内遺跡一覧表	2
----------------	---

## 観察表目次

弥生土器 1~15	29
弥生土器 16~19、土師器 20~30	30
土師器 31~38、土製支脚 39~42、かまど 43~47	31
須恵器 48~62	32
須恵器 63~77	33
須恵器 78~80、その他 81・82、SI	34

## 図版目次

図版 1 調査区遠景、SS-02、B区遺物出土状況	
図版 2 SS-03、B区完掘状況、C区ピット群	
図版 3 SS-06、A区完掘状況、C区完掘状況	
図版 4 弥生土器 1~19、土師器 20~24	
図版 5 土師器 25~38、土製支脚 39	
図版 6 土製支脚 40~42、かまど 43~47、須恵器 48・49	
図版 7 須恵器 50~60	
図版 8 須恵器 61~74	
図版 9 須恵器 75~80、その他 81・82、SI	

## 第1章 調査に至る経緯

県営北条西2期地区農免農道整備事業は曲古墳群が所在する丘陵の裾部に沿って、東西に走行する形で計画された。これにより、曲地区の丘陵裾部の遺跡の有無について調査する必要が生じたため、北条町教育委員会は平成5年10月、曲地区（通称「曲岡」）における試掘調査を行った。

調査の結果、明確な遺構は認められなかったものの、多量の土器類が出土した。

これを受けて、北条町教育委員会は県教育委員会文化課、県埋蔵文化財センターと協議した結果、計画地のほぼ全域について、事前に発掘調査を行い記録保存することにした。

調査期間は平成6年4月4日から平成7年3月24日の間である。

なお、本遺跡は遺物散布地「曲第1遺跡」として遺跡台帳に記載されていたが、字名をとって、新たに「曲岡遺跡」と命名した。

## 第2章 位置と環境

**北条町** 県の中央部に位置し、町域は県下第3の河川、天神川の左岸を占め、北部は海岸砂丘、中央部は沖積低地が広がり、南部山地は大山火山碎屑岩類と安山岩からなる丘陵性山地である。東は天神川を隔てて羽合町、西は大栄町、南は倉吉市に接し、北は日本海に面している。面積は20.99km<sup>2</sup>と小さな町であり、当町は、町域の中央をJR山陰本線と県道羽合・東伯線（旧国道9号）が、さらに、国道9号線は海岸砂丘を東西に、ほぼ並行して走っている。

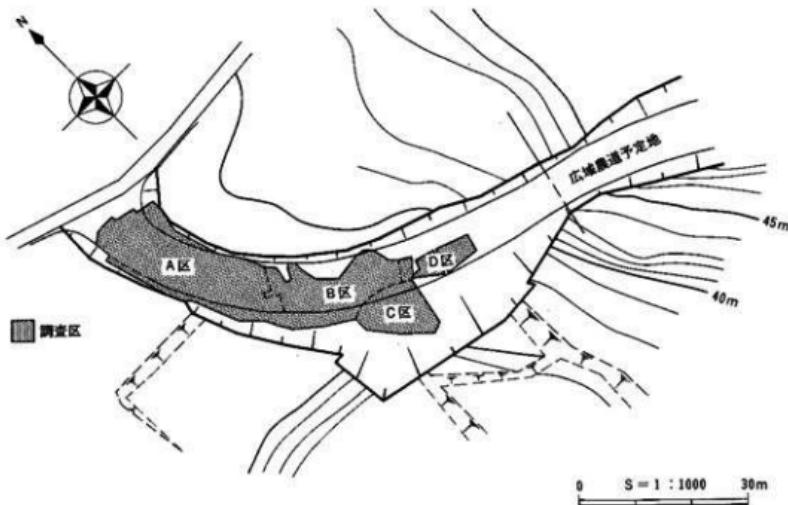


図1 曲第1遺跡（曲岡遺跡）位置図



挿図2 北条町遺跡分布図

A. 曲第1遺跡(曲岡遺跡)	1. 曲古墳群	2. 土下古墳群
3. やすみ塚(土下213号墳)	4. 茶臼山古墳群	5. 北尾古墳群
6. 島古墳群	7. 天王山遺跡	8. 北尾遺跡
9. 島遺跡	10. 曲226号墳	11. 船渡遺跡
12. 米里銅鐸出土地	13. 米里第1遺跡	14. 米里第2遺跡
15. 天神川河床遺跡	16. 宇ノ塚遺跡	17. 殿屋敷遺跡
18. 馬場遺跡	19. 用露鼻遺跡	20. 長畠遺跡
21. 茶臼山要害	22. 中浜遺跡	23. 下神1号墳

挿表1 北条町内遺跡一覧表

**曲岡遺跡**　曲岡遺跡は町の南西部、標高171mを測る卿ヶ家山の北麓に位置する。現況は果樹園であり、北条平野、大栄町東端の眺望は良好である。なお、本遺跡の後背には、225基以上を数える古墳群が所在する曲古墳群が控えている。

**所在地**　曲岡遺跡は北条町曲地内に所在し、地番は北条町曲字岡773番地ほかである。

**歴史的環境**　縄文時代前期になると台地上から遺跡が低湿地へ移動しており、爪形文や刺突文土器が島遺跡（9）から出土している。中期、後晩期も低湿地の遺跡が継続して営まれており、島遺跡の他に、船渡遺跡（11）、天神川河床遺跡（15）などが見られる。

町内の弥生時代の様相は明確ではないが、曲岡遺跡（A）、北尾遺跡（8）、島遺跡などで弥生土器が出土している。

また、米里（12）の通称「藏合屋」と呼ばれる畠地からは、弥生土器の壺と共に、婆娑櫛の銅鏡が発見され、祭器の出土にこの地域の高度な弥生文化の一端を知ることができます。

町内の古墳時代の墓制を窺うと、前期前半には径20mの円墳、曲148号墳など箱式石棺を中心とした古墳が築造されはじめ、中期に入っても、20m以上の方墳、土下129号墳などに箱式石棺墓が継続されている。

後期には小型の前方後円墳や大型の円墳を中心として、曲古墳群（1）、土下古墳群（2）、茶臼山古墳群（4）、北尾古墳群（5）といった群集墳が盛んに築造され、県下有数の古墳分布を形成しており、当地域が倉吉と共に伯耆の中心であったことがうかがえる。

特に、全長33mを測る前方後円墳、土下213号墳（通称「やすみ塚」）の周辺からは、鹿埴輪の他に、人物埴輪、家型埴輪など。最近の調査で土下210号墳からは、全国でも希有な「鹿の子文」をもつ人物埴輪、帽子をかぶっていると考えられる人物埴輪、「斜格子文」をもつ人物埴輪が出土し、当古墳群が高度な後期古墳文化のもとに形成されたことを示している。

古墳時代の集落は曲岡遺跡（A）にみられ、山裾部や平野部に営まれている。その他、中世に至るまで、著名な遺跡は枚挙に暇がないほどである。

## 第3章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

**調査地** 調査地は丘陵裾部の緩斜面にあたり、現況は果樹園である。地形から、北側の裾部をA区とし、南側の丘陵上に向けてB区、C区、D区と分割した。

**調査面積** A区245m<sup>2</sup>、B区140m<sup>2</sup>、C区110m<sup>2</sup>、D区50m<sup>2</sup>で、計495m<sup>2</sup>である。

**A区** まずA区の調査から開始し、続いてC区、D区を行い、遺物が多量に出土したB区を最終調査区とした。その結果A区では遺構、遺物とも全く認められなかった。

**B区** B区では多量の土器包含層が厚く堆積しており、調査面積140m<sup>2</sup>の中に、弥生土器をはじめ、土師器、須恵器などの土器類が、コンテナ15箱分出土している。遺構は竪穴住居跡3棟、段状遺構5基、溝状遺構2本、土壙1基で、いずれも古墳時代後期のものである。

**C区** C区ではピット群が認められた。遺物は若干の土師器、須恵器が出土したのみである。

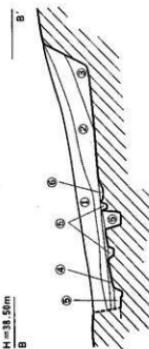
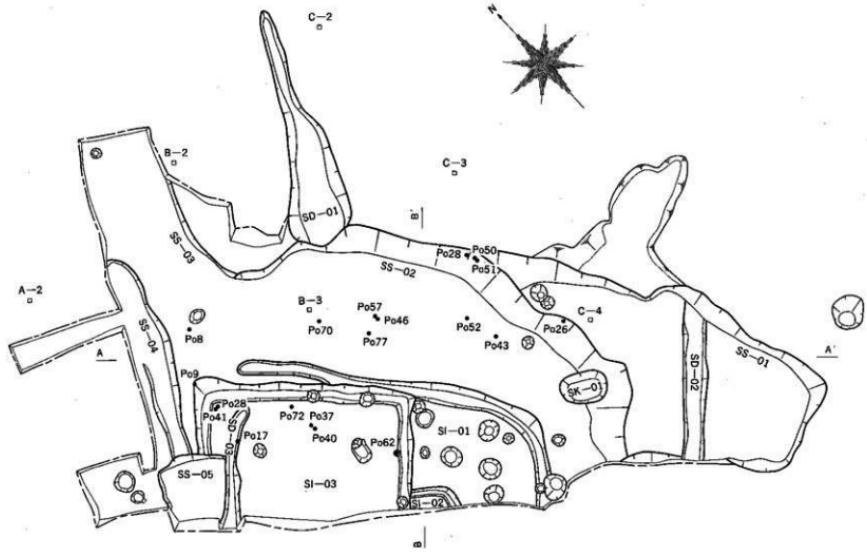
**D区** D区では時期不明の段状遺構1基を確認したが、遺物は全く出土しなかった。

### 第2節 B区・C区の調査

**B区** B区は標高37~38mを測る緩斜面部で、東西方向にややテラス地形を呈す所が認められた。ここに竪穴住居跡をはじめとする古墳時代後期の遺構が切り合った状態で検出された。多量の遺物が出土しているが、このうち弥生土器は堆積層上位～中位の暗茶褐色土中で、上方から流れ込んだものと推定される。土師器、須恵器は堆積層中位～下位にまんべんなくみられ、その出土量は、本遺跡の遺物出土量の大半を占める。

**C区** C区は標高35m前後を測る緩斜面部で、古墳時代後期と推定されるピット群が認められた。遺物は土師器、須恵器が出土している。

**D区** なお、D区は標高38mを測る果樹園に改変された平坦面で、遺構面も後世、大きく削平されている。ここでは、段状遺構1基が確認された。D区では遺物は全く出土しなかった。



- ① 細茶褐色腐植質土に埋没じり
- ② 茶褐色土
- ③ 黄茶褐色土
- ④ 雜色土
- ⑤ 線茶褐色土
- ⑥ 線茶褐色土に細礫混じり

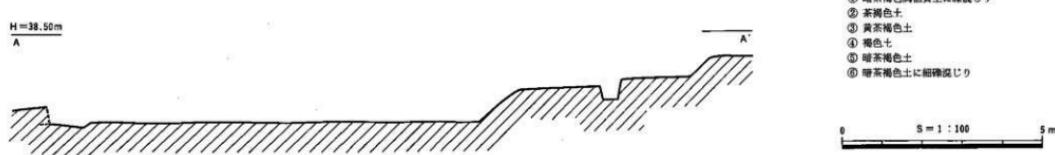


図3 B区全体遺構図

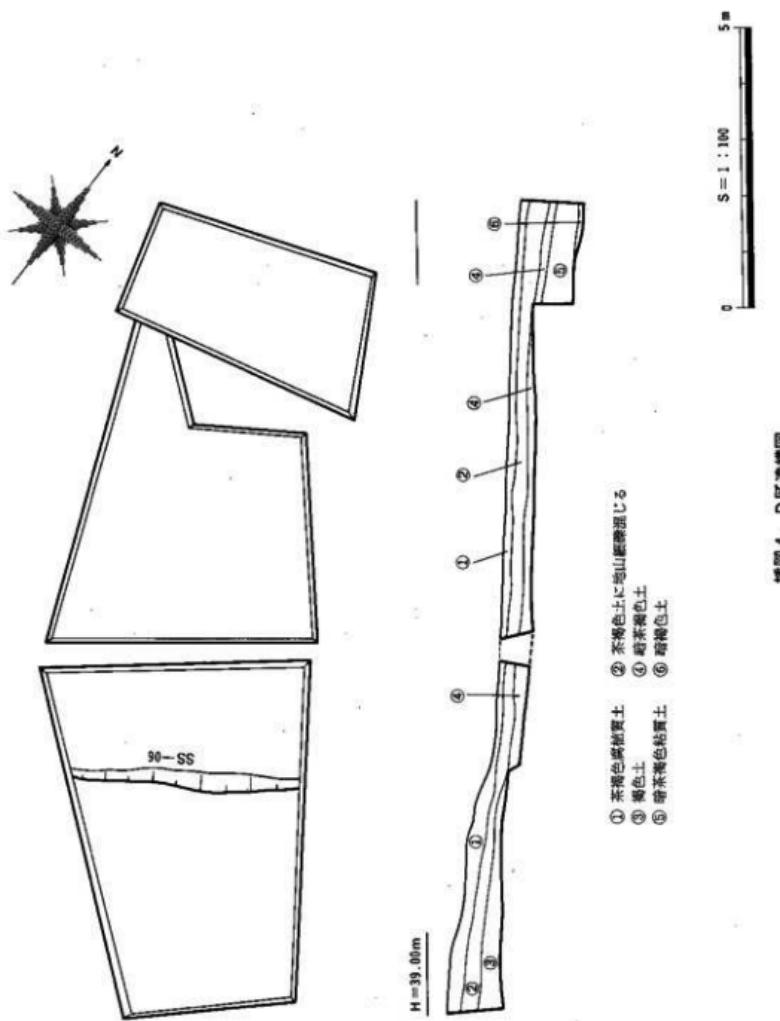


図4 D区地盤図

## 第1竪穴住居跡（挿図5、図版2）

位 置 B区南隅に位置する。本住居跡西側は第3竪穴住居跡により大きく切り込まれている。

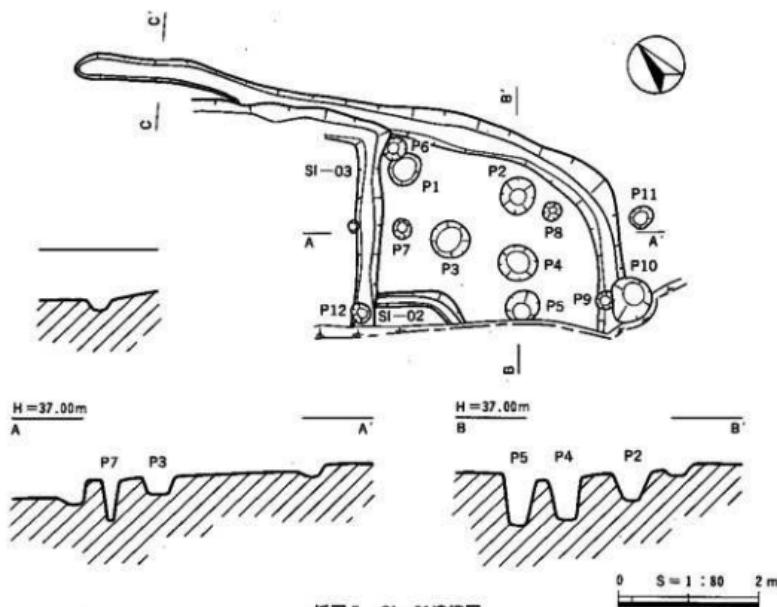
また、南西側床面が第2竪穴住居跡により一部切り込まれている。残存する床面の平均標高は36.30mを測る。

形 様 残存する側溝より平面長方形もしくは方形を呈すと推定される。壁高は東壁で最高14cmを測る。残存する床面は平坦で長辺3.10m、短辺2.50m、残存床面積5.58m<sup>2</sup>である。

側 溝 側溝は北側～東側側壁下に残存し、長辺7.20m、幅25～10大字、深さ7～4cmを測り、断面U字形を呈す。

柱 穴 柱穴は残存する床面や側溝中で11本検出された。ただし、切合い状況や調査区の関係から西側及び南側が不明なため、これらの柱穴が建替えを含めて、全て本住居跡に伴うものか否かは現況では言及し得ない。規模はP1(50×44-66)、P2(54×48-42)、P3(55×50-28)、P4(56×51-59)、P5(48×44-60)、P6(36×30-63)、P7(30×23-69)、P8(28×27-33)、P9(25×24-29)、P10(65×58-58)、P11(35×30-12)cmである。

時 期 遺物は全く出土しなかったため、時期は明確にし得ないが、その切り合い関係から本住居跡は第2、第3竪穴住居跡よりも古く、立地条件等から古墳時代後期頃のものと思われる。



挿図5 SI-01遺構図

## 第2竪穴住居跡（挿図5、図版2）

位 置 B区南隅に位置する。第1竪穴住居跡の床面を切り込んで造られている。また、西側は第3竪穴住居跡により切り込まれている。

形 態 調査区の関係から東側側壁の一部と、その側壁下を巡る側溝の一部、そして床面の一部を検出したに留まる。残存する側溝より平面方形プランと推測される。壁高は13cmを測り、残存する床面は長辺1.20m、短辺0.40m、残存床面積0.45m<sup>2</sup>である。

柱 穴 第3竪穴住居跡南側側溝中で検出されたP12 (26×25—10) cmは本住居跡に伴う柱穴と推定される。

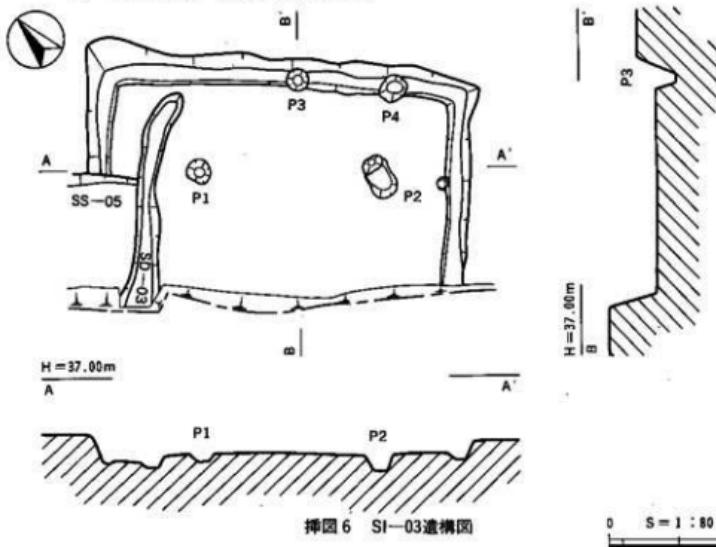
時 期 遺物は全く出土しなかった。切り合い関係から第3竪穴住居跡より古く、また、第1竪穴住居跡より新しく、古墳時代後期頃のものと思われる。

## 第3竪穴住居跡（挿図6、図版2）

位 置 B区南西側に位置する。第1竪穴住居跡西側床面を大きく切り込んで造られている。さらに、第2竪穴住居跡をも切り込んでいる。また、本住居跡西側には第5段状遺構が、西側床面には第3溝状遺構が掘り込まれている。床面の平均標高は35.90mを測る。

形 態 調査区の関係から南側は不明であるが、残存部から平面方形と推定される。壁高は北東壁で最高35cmを測る。残存する床面は平坦で、長辺4.70m、短辺は残存部3.00m、残存床面積12.05m<sup>2</sup>である。

側 溝 側溝は側壁下に「門」の字形に残存し、長辺5.10m、短辺は残存部2.60m、幅22～6cm、深さ10～4cmを測り、断面U字形を呈す。



挿図6 SI-03遺構図

**柱穴** 柱穴は床面で2本、北東側側溝中で2本検出されたが、このうち主柱穴はP1、P2の2本で、規模はP1(38×34-31)、P2(61×35-29)cmを測り、柱穴間距離は2.60mである。側溝中に掘り込まれたP3(32×29-20)、P4(38×34-28)cmは補助柱穴であろう。

なお、本住居跡は調査区の関係から南側が不明なため、主柱穴が2本か、或いは4本で構成されるか否かは現況では不明である。

**遺物** 床面東端直上で須恵器杯身(P<sub>o</sub>、62)、埋土中よりP<sub>o</sub>、72が出土している。

**時期** 出土遺物より、古墳時代後期(7世紀前葉)のものと考えられる。

#### 第1段状遺構(挿図7、図版2)

**位置** B区南東端に位置する。本遺構中央部に第2溝状遺構が掘り込まれている。

**形態** 平坦面は長辺7.60m、短辺3.80mを測り、壁高は東壁で最高35cmである。

**時期** 遺物が全く出土しなかったため、時期不明である。

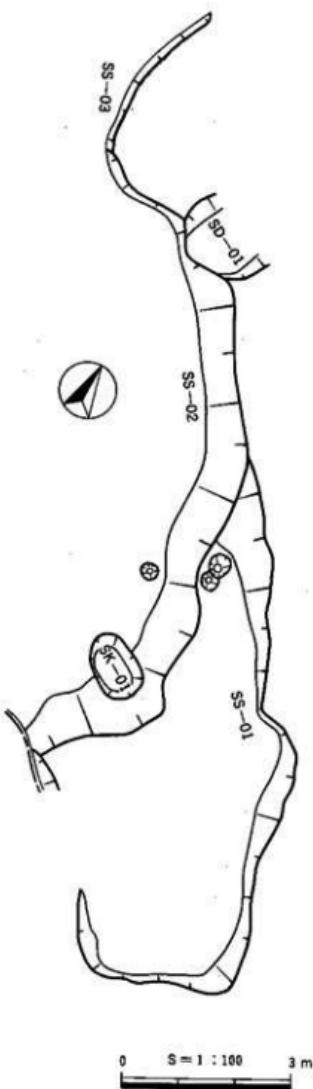
#### 第2段状遺構(挿図7、図版2)

**位置** B区中央に位置する。南東側に第1段状遺構、北側に第1溝状遺構、さらに北西側に第3段状遺構が接している。また、西側には第1竪穴住居跡、南東側壁面から平坦面にかけて第1土壤が掘り込まれている。

**形態** 平坦面は長辺9.80m、短辺3.20mを測り、東側の壁高は最大で1.10mを残す。

**遺物** 平坦面直上でかまと(P<sub>o</sub>、43・46)、埋土中より須恵器杯蓋(P<sub>o</sub>、52・57)、須恵器提瓶(P<sub>o</sub>、77)などが出土している。

**時期** 出土遺物(P<sub>o</sub>、43)より、7世紀中頃のも



挿図7 SS-01・02・03遺構図

のと思われる。

### 第3段状遺構（挿図7、図版2）

位 置 B区北側に位置する。南側に第2段状遺構が接し、西側に第4段状遺構が掘り込まれている。

形 態 調査区の関係で北側が不明であるが、平坦面は残存部で長辺4.30m、短辺2.00mを測り、東側の壁高は最大で30cm残こす。

時 期 遺物は全く出土せず、時期は不明であるが、立地条件や第2段状遺構との切り合い関係から、第2段状遺構より古く、古墳時代後期頃のものと推定される。

なお、弥生土器甕口縁部（P、8・9）は遺構外出土のものである。

### 第4段状遺構（挿図8、図版2）

位 置 B区北西端に位置する。東側に第3段状遺構が接し、南側には第5段状遺構が掘り込まれている。

形 態 調査区の関係で長辺5.10m、高さ0.20mを測る東壁と、その下に残存する長さ2.50m、幅40~30cm、深さ6cm程の浅い側溝を検出したに留まる。

なお、本遺構平坦面南側にはピット2本、規模は（46×45-18）、（25×24-10）cmが検出されている。

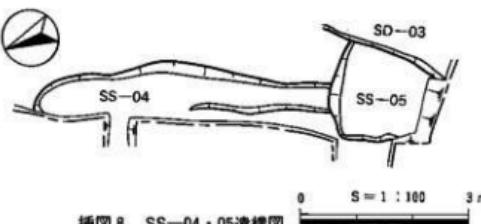
時 期 遺物は全く出土せず、時期は不明であるが、立地条件等から古墳時代後期頃のものであろう。

### 第5段状遺構（挿図8、図版2）

位 置 B区西端に位置する。北側の第4段状遺構を一部切り込み、東側は第3溝状遺構により消滅している。また、北側は第3堅穴住居跡の一部を切り込んでいる。

形 態 調査区の関係で長辺1.70m、高さ0.25mを測る北壁と、その下に残存する長さ1.60mの平坦面が残存するのみである。土壤状の形態をとるが、調査区の関係で南側が不明なため、取放えず段状遺構として扱った。

時 期 遺物は全く出土しなかったが、立地条件や第3堅穴住居跡と第4段状遺構、並びに第3溝状遺構との切り合い関係から、少なくとも第3堅穴住居跡と第4段状遺構より新しく、第3溝状遺構よりは古く、古墳時代後期（7世紀前葉以降）のもので、これらに近似する時期であろう。



挿図8 SS-04・05遺構図

### 第1溝状遺構（挿図9）

位 置 B区北端に位置する。南端が第2段状遺構に接している。

形 態 南北に帯状に延びる溝で、北に行く程底面が広くなっている。規模は長さ6.10m、幅1.60~0.38m、深さ0.38~0.10mを測る。

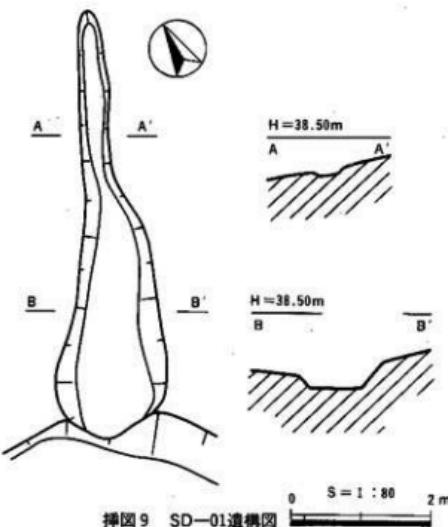
時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

### 第2溝状遺構（挿図3）

位 置 B区南東側に位置する。第1段状遺構平坦面に掘り込まれている。

形 態 南東から北西に帯状に一直線に延びる溝で、残存部の規模は長さ6.00m、幅0.6~0.5m、深さ20cm程度のものである。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、切り合い関係から第1段状遺構より新しい。



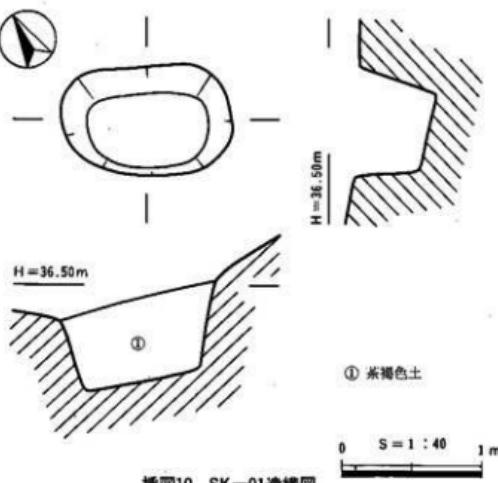
挿図9 SD-01遺構図

### 第3溝状遺構（挿図6）

位 置 B区西側に位置する。第3竪穴住居跡の床面に掘り込まれている。

形 態 南東から北西に帯状に延びる溝で、残存部の規模は長さ3.20m、幅0.40~0.25m、深さ10を測る。

時 期 遺物が全く出土しなかつたため、時期は不明であるが、切り合い関係から、第3竪穴住居跡、第5段状遺構より新しい。



挿図10 SK-01遺構図

### 第1 土壌 (挿図10、図版2)

位 置 B区南東側に位置する。第2段状遺構南東側壁面から平坦面にかけて掘り込まれている。

形 態 平面長方形を呈し、主軸はN-60°-Wをとる。上縁部の規模は長辺1.20m、短辺0.76mを測る。底面はやや傾斜がつき、長辺0.85m、短辺0.52mで、深さは0.78mである。埋土は茶褐色土の單層。

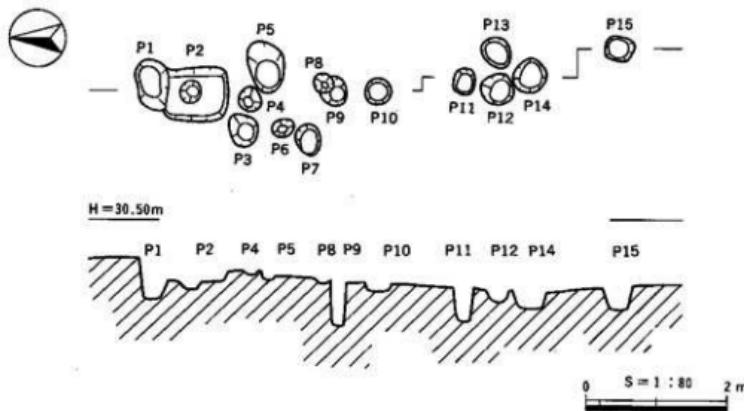
時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期・性格とも不明であるが、立地条件等から第2段状遺構に関連する施設の可能性がある。

### C区ピット群 (挿図11、図版2)

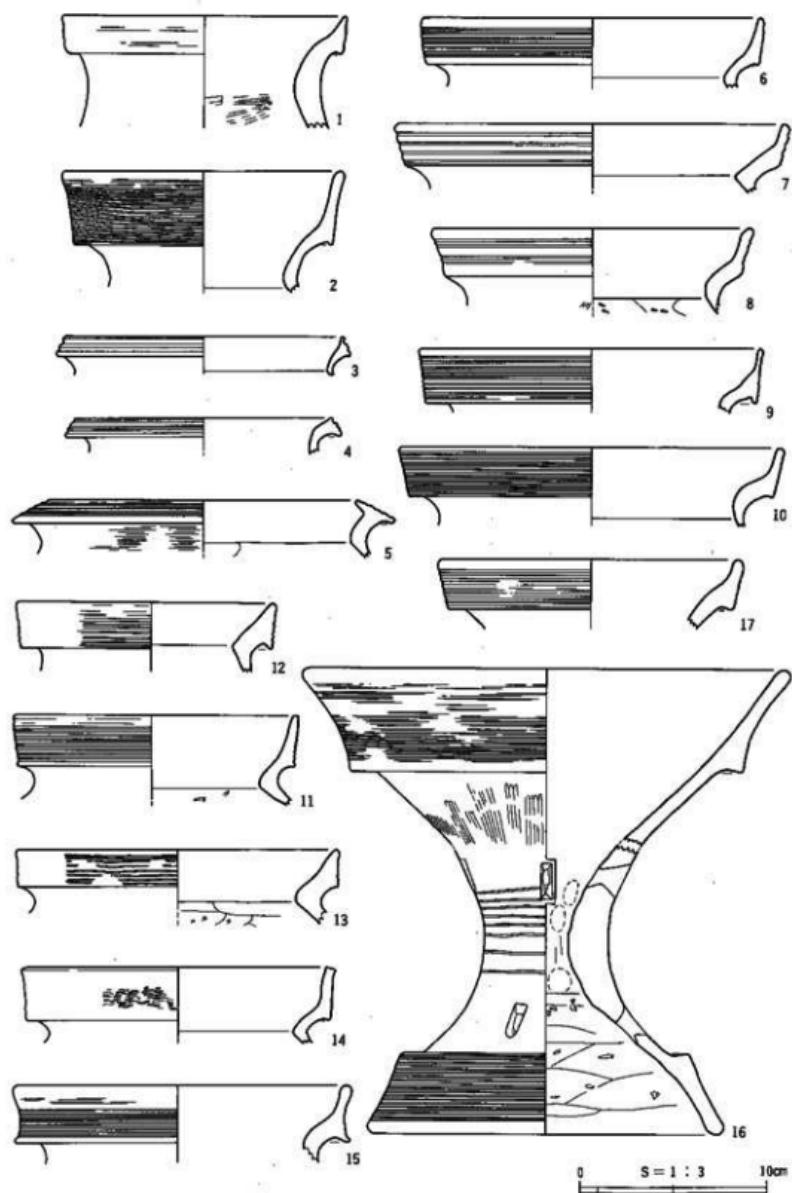
位 置 C区南側に位置する。

ピット 平坦面で15本のピットを検出した。これらはほぼ南北方向に並んでおり、規模はP1 (56×42-54)、P2は平面長方形を呈する二段掘りのもので、86×76-18の中に26×24-10、P3 (44×40-22)、P4 (32×30-10)、P5 (75×50-20)、P6 (30×25-10)、P7 (42×34-18)、P8 (25×25-8)、P9 (42×40-65)、P10 (38×38-10)、P11 (38×32-48)、P12 (45×42-21)、P13 (46×38-22)、P14 (46×44-25)、P15 (42×36-33) cmを測る。

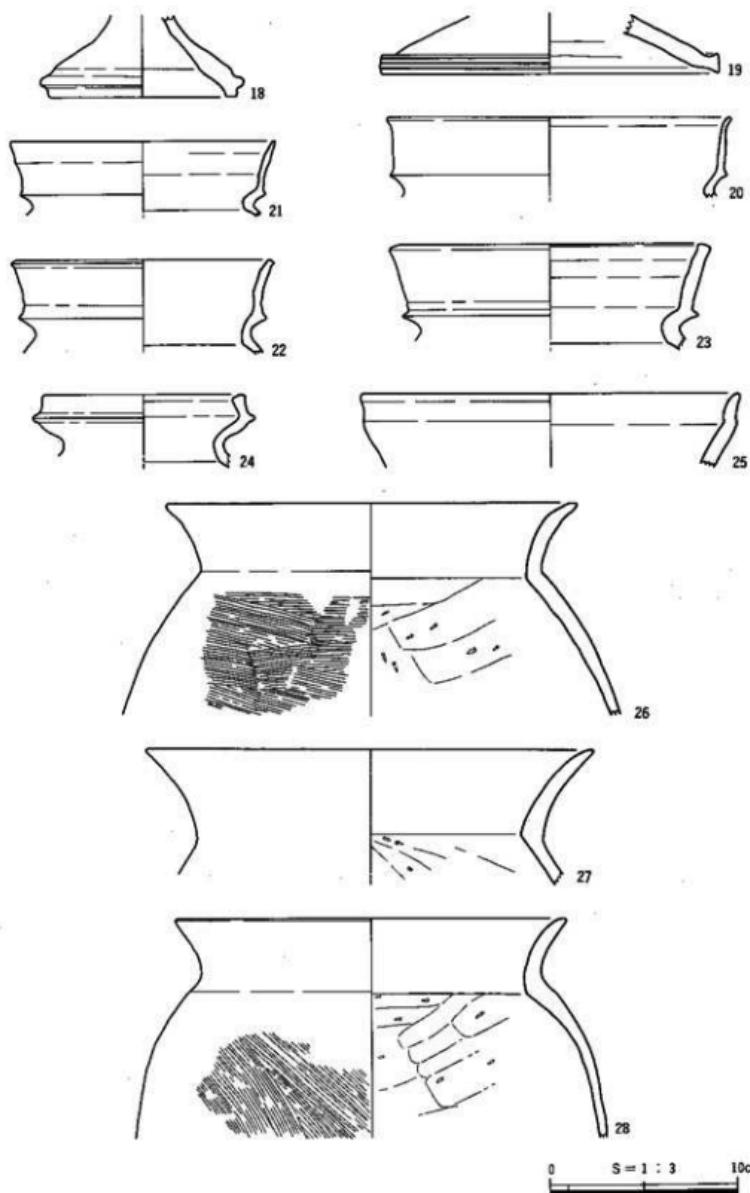
時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期・性格とも不明である。



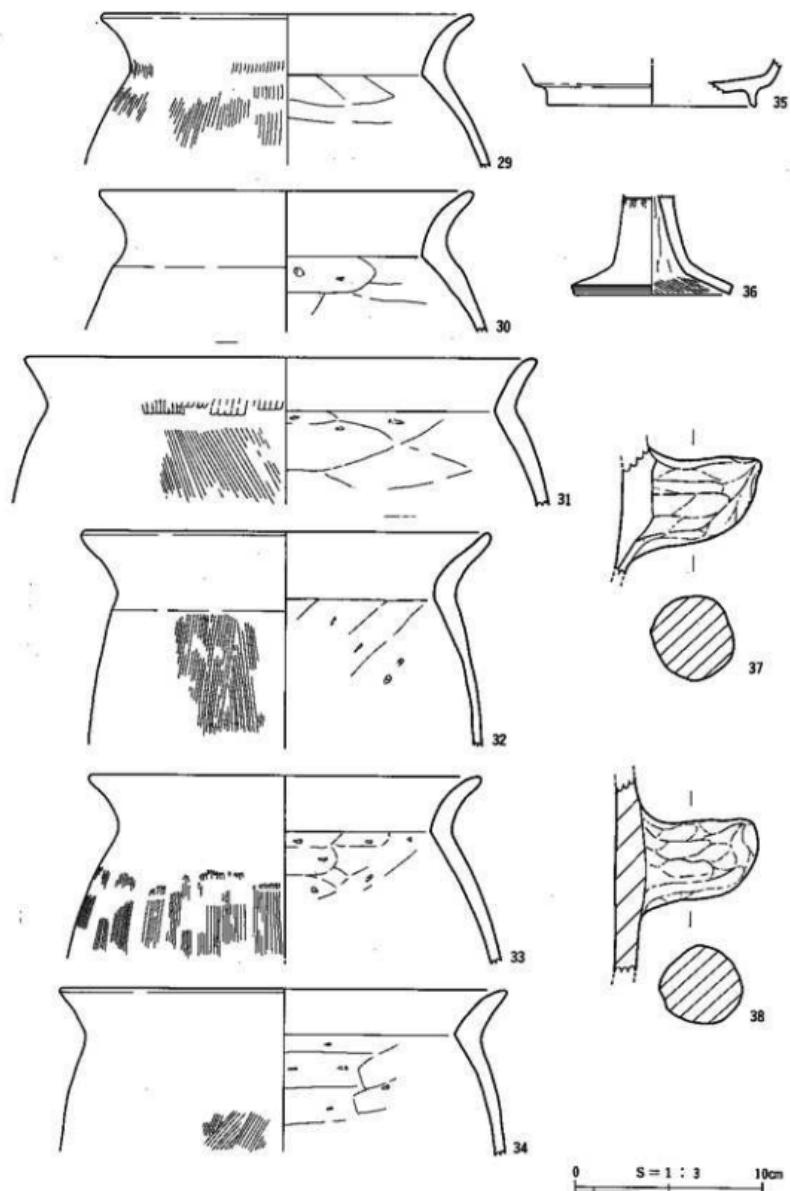
挿図11 C区ピット群遺構図



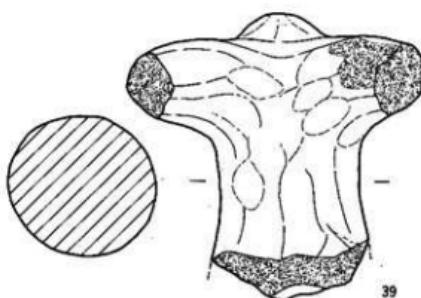
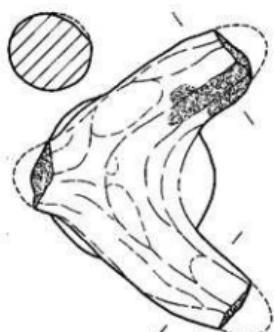
挿図12 出土土器実測図（その1）



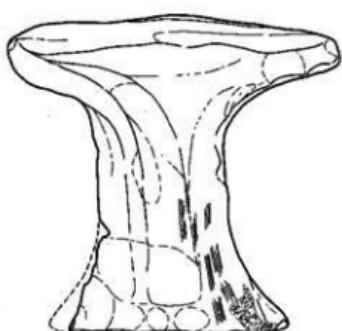
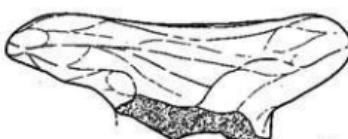
挿図13 出土土器実測図（その2）



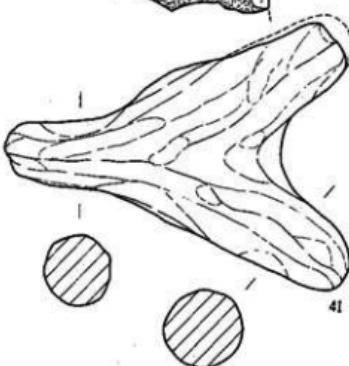
挿図14 出土土器実測図（その3）



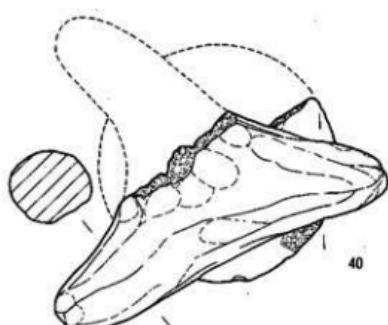
39



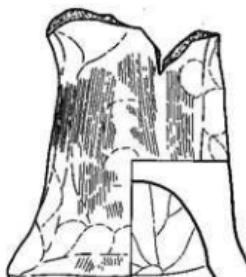
40



41



42

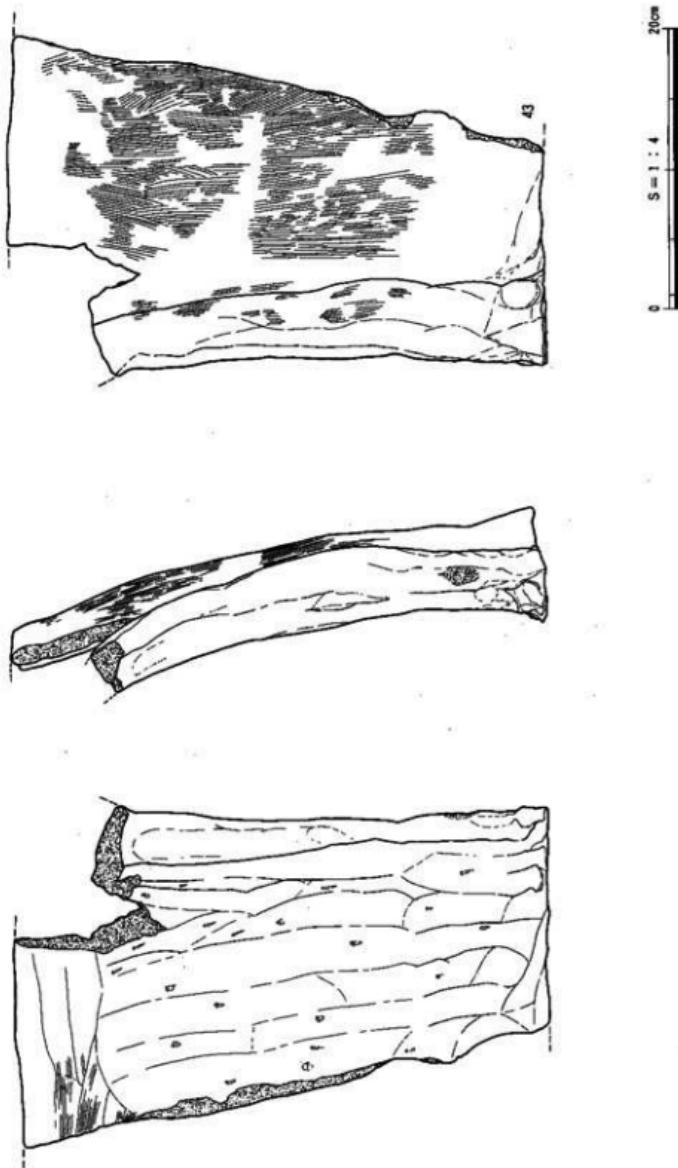


42

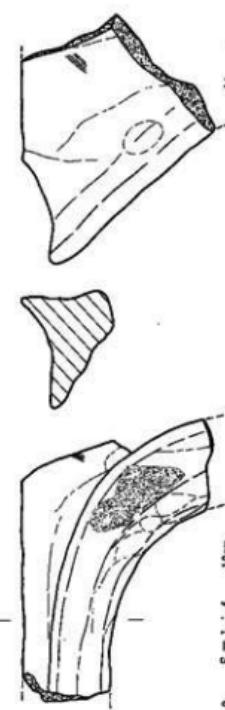
0 S = 1 : 3 10cm

挿図15 出土土器実測図（その4）

插図16 出土土器素描図（その5）



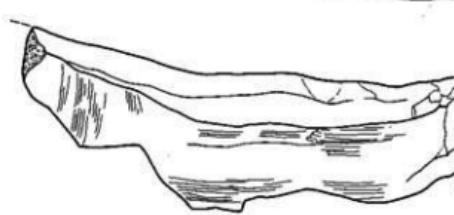
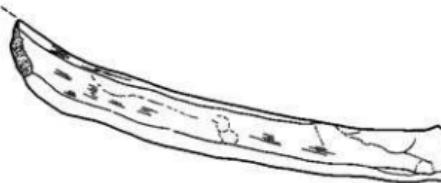
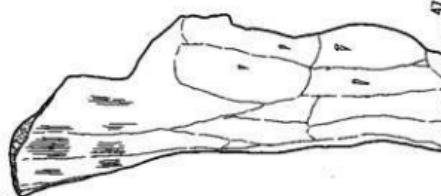
地図17 出土土器実測図 (その6)

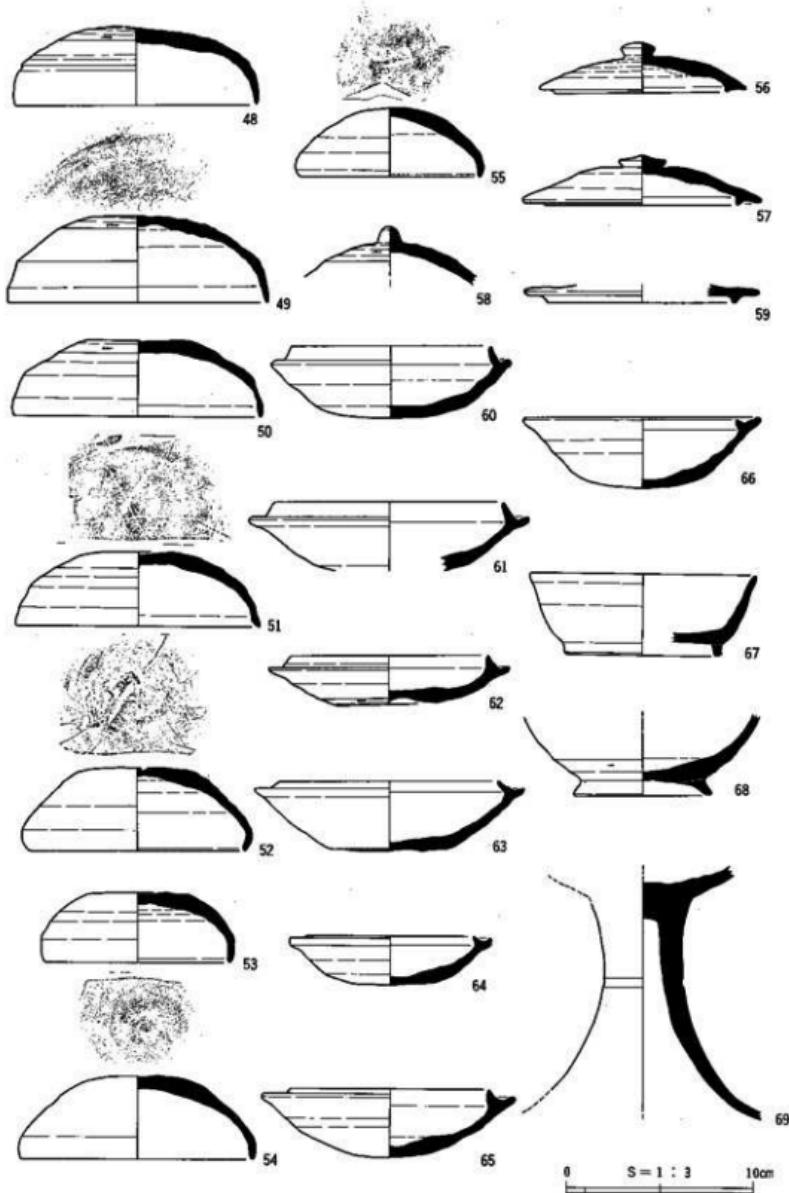


45

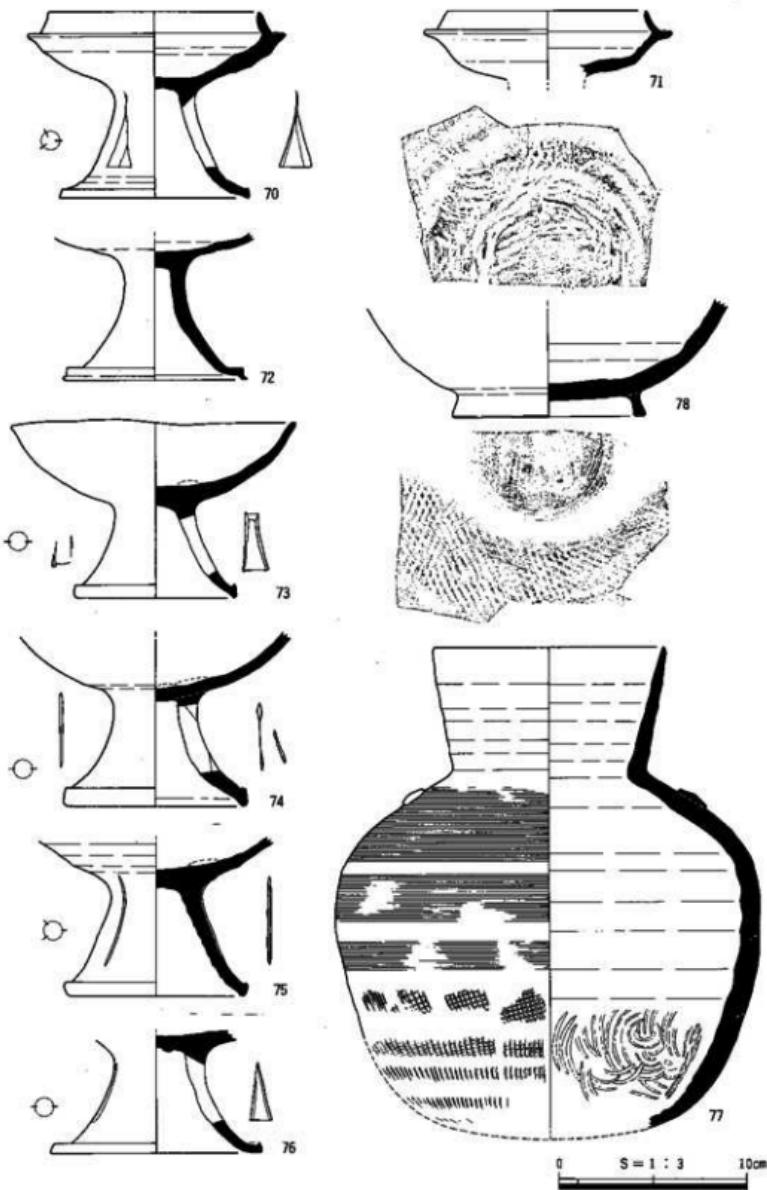
46

47

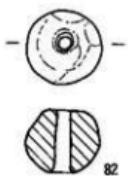
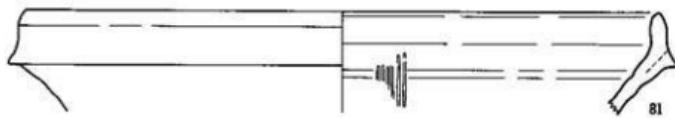
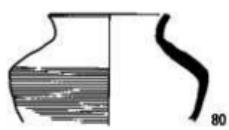
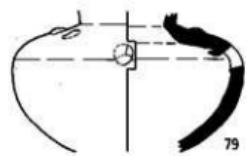




挿図18 出土土器実測図（その7）



挿図19 出土土器実測図（その8）



0 S = 1 : 3 10cm

挿図20 出土土器・石製品実測図（その9）

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構について

曲岡遺跡では、遺構はB区で竪穴住居跡3棟、段状遺構5基、溝状遺構3本、土壙1基。C区でピット群を検出した。これらの遺構のうち、遺物が伴出せず、時期不明なものもみられたが、ここではB区で検出された遺構について概観する。

#### 1. B区の遺構

B区では標高37~38m前後の丘陵裾部緩斜面で、東西方向にややテラス地形を呈す所が認められ、ここに竪穴住居跡をはじめとする古墳時代後期の遺構が切り合った状態で検出された。

##### (竪穴住居跡) S1-01・02・03

S1-01は長辺7.2m程の長方形もしくは正方形プランで、残存部は全形の4分の1程度と推定される。

S1-02は調査区と切り合い関係から、わずかに方形を呈すものであろうと予想ができる程度の部分しか検出されていない。

S1-03は調査区と切り合い関係から、一部不明な所もあるが、一辺5.1m程の方形プランで、床面より主柱穴2本が検出されている。3棟の竪穴住居跡は切り合った状態であり、いずれも側壁下に側溝を巡らしており、主軸方向も北西~南東にとっている。古墳時代後期、恐らく7世紀前半を中心として、土地条件の制約のもとに営まれたものであろう。なお、3棟とも炉跡等は全く検出されていない。

##### (段状遺構) SS-01・02・03・04・05

SS-01は長辺7.6m、短辺3.8mを測る平坦面をもつ。

SS-02は長辺9.8m、短辺3.2mを測る平坦面をもち、立地条件、出土遺物等からSS-03造営時に既に機能しており、その関連施設と考えられよう。なお、SK-01はSS-02の南東側壁面から平坦面にかけて掘り込まれた長辺1.20m、短辺0.76m、深さ0.78mを測る長方形プランの土壙である。

SS-03は現況で長辺4.3m、短辺2.0mの平坦面をもつが、立地条件、切り合い関係からSS-04と同時期（古墳時代後期）に機能した関連施設であろう。

SS-05については現況では性格については触れられない。

##### (溝状遺構) SD-01・02・03

これらの溝状遺構は切り合い関係から明らかに後世のものと考えられるが、遺物も全く出土しなかったため、現況では性格とともに不明である。

以上、簡単にB区の遺構について概観したが、調査区と切り合い関係等から、余りにも資料が断片的であり、全く本質にせまることができなかつた。これらの点については今後の課題といふ。

## 第2節 遺物について

曲岡遺跡では、特にB区に集中して遺物が出土している。遺構に伴うものは、わずかであり、大半が遺構外からの出土であった。器種をみると、弥生土器・土師器・須恵器などである。ここでは、これらの遺物を弥生土器・土師器・須恵器・その他に分類し、観察結果を概述する。

### 1. 弥生土器

全てのものが遺構外出土であり、器種構成をみると壺・甕・高杯などである。

#### (壺形土器) 1・2

1はほぼ直立する複合口縁で、外面に数条の凹線文を施す。内面頸部にヨコハケ。

2は淡黄茶色を呈すやや外傾する長めの複合口縁で、外面に櫛描直線文を施す。内面肩部削り。

時期的にみると、1は弥生時代後期前葉、2は後期後葉に位置付けられる。

#### (甕形土器) 3~15

3・4は口縁端部はわずかに拡張され、内傾する外面に2条(3)、3条(4)の凹線文を施す。

3は内面頸部削り。

5は口縁端部は上下に幅広く拡張され、大きく内傾する外面に5条の凹線文を施す。内面頸部以下削り。以上3~5は弥生時代後期前葉以前のものであろう。

6はほぼ直立する複合口縁で、外面に7条以上の擬凹線文を施す。

7・8は外傾する複合口縁で、外面に4条(7)、4条以上(8)の凹線文を施す。

9はやや外傾する複合口縁、10は外傾する複合口縁で、外面に10条(9)、12条(10)の櫛描直線文を施す。

11・14はほぼ直立する複合口縁で、口縁端部は角張り、11は外面に櫛描直線文、14は外面に波状文を施す。

12はほぼ直立する短かめの複合口縁で、外面に櫛描直線文、13は直立する複合口縁で、外面にヘラ描直線文の後、横ナデを施す。

15はやや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁で、口縁端部は丸くおさめる。下端の稜は外方に尖り、外面に櫛描直線文を施す。

以上6~15のうち、頸部が不明瞭な9・15を除き、他は全て内面頸部以下削りを施す。時期的にみると、弥生時代後期中葉・後葉に位置付けられる。

#### (鼓形器台) 16・17

16は受部と脚台部を複合状につくり、外面に擬凹線文を巡らし、筒部に長方形透し孔を穿ち、中程に8条のヘラ描直線文を施す。外面筒部上位にタテハケメ、内面筒部下位以下削り。

17は複合状の受部で、外面に擬凹線文を施す。

時期的にみると、弥生時代後期中葉に位置付けられる。

#### (脚部) 18・19

18は高杯の脚台部で、八の字状に開き、接地面は角張り、水平方向に突出する稜をもつ。

19は大きく八の字状に開く複合状の脚台部で、外面に3条の凹線文を施す。

時期的にみると、18・19とも内面削りを施し、弥生時代後期に位置付けられる。

以上、曲岡遺跡出土の弥生土器は弥生時代後期前葉～後葉のもので、本遺跡内、特に丘陵上にこれらの時代の遺構が所在する可能性は極めて高い。

## 2. 土師器

若干の遺構に伴うものがみられるが、大半は遺構外出土である。器種構成をみると、壺・杯・高杯・把手などである。

### (壺形土器) 20～34

20は直立して立ち上がり、端部がわずかに外方に屈曲する複合口縁。器壁は薄い。

21はやや外反気味に外傾する複合口縁で、口縁端部はすぼまる。器壁は薄い。

22は外反気味に外傾する複合口縁で、上端面は角張り、やや外方に肥厚する。下端の稜は外方に突出する。

23は外傾する複合口縁で、上端面は角張り、下端の稜は外方に鋭く突出する。

24は内傾する短かい複合口縁で、上端面は角張り肥厚し、下端の稜は水平方向に突出する。

以上のものは複合口縁形態をもち、時期的にみると、20・21は青木IV期併行で古墳時代前期初頭。22は青木V・VI期併行で前期前半。23は青木VII期併行で前期後半。24は複合口縁の退化期で中期中葉に位置付けられる。

25はほぼ直立する短かい退化した複合状を呈す。

26・27・28は外反する長めの単純口縁で口縁端部はすぼまる。

29・30・33は外反する単純口縁で、口縁端部は角張る(29)、丸味をもつ(30・33)。

31は外傾する単純口縁。

32は外反気味に外傾する単純口縁で、口縁端部はやや角張る。

34は外反する単純口縁で、口縁端部はすぼまる。

以上25～32のものは、時期的にみると、25は古墳時代中期末葉。26～34は全て「くの字」に屈曲する単純口縁をもつが、古墳時代後期(6世紀・7世紀)に位置付けられよう。

### (杯) 35

35は有台杯で、高台は低く、接地面は平坦。腰に平坦面を作り出す。8世紀中葉頃のものか。

### (高杯) 36

36は高杯の脚台部で、端面に2条の浅い沈線を施す。

### (把手) 37・38

37・38とも牛角状の把手。

## 3. 須恵器

土師器同様、若干の遺構に伴うものもみられるが、大半は遺構外出土である。器種構成をみると、杯蓋・杯身・高杯・提瓶・壺などである。

### (杯蓋) 48～59

48は口縁部と天井部の境は2条の浅い沈線で区別される。外面天井部3周ヘラ削り、中心部ナデを施す。

49は口縁部と天井部の境は強めのナデにより純い稜をもつ。外面天井部2周ヘラ削り、中心部ナデを施す。外面天井部ヘラ記号。

50・51は口縁部と天井部の境に稜はなく、不明瞭。50は天井部2周ヘラ削り、中心部ナデ・51は天井部ヘラ切り後、ナデを施す。外面天井部ヘラ記号。

52・53・55は口縁部と天井部の境に稜はなく不明瞭で、体部から口縁部が丸く内湾する。外面天井部ヘラ切り未調整。52は外面、53は内面天井部にヘラ記号。

54は口縁部と天井部の境は不明瞭で、外面天井部ヘラ切り後ナデを施す。

56は宝珠状のつまみ、57は擬宝珠状のつまみがつき、かえりは口縁部からわずかに出る。

58はTK-217型式併行。乳頭状のつまみがつく。外面天井部3周ヘラ削り。

59は蓋。

以上のものは、⑧(陰田A-2b類)天井部周辺を2~3周削り、中心部を削りのこし、これにナデを施すもの(48・49・50)。⑨(陰田A-3類)天井部ヘラ切り後ナデを施すもの(51・54)。⑩(陰田A-4類)天井部ヘラ切り未調整のもの(52・53・55)で、このうち、53・55は口径10cm未満である。⑪乳頭状つまみとかえりがつき、口径が10cm前後のもの(58)。⑫宝珠状、或いは擬宝珠状つまみとかえりがつくもの(56・57)。TK-48型式併行。⑬その他(59)に分類のされ、④から⑩、⑪から⑬へと流れを追うことができる。時期的にみると、⑧7世紀初頭、⑨~⑭7世紀中葉~後葉。⑪7世紀前葉。⑫7世紀後葉に位置付けられる。

(杯身) 60~67

60・61は風化の為、外面調整不明。60は内面底部ヘラ記号。

62は立ち上がりは短かく内傾し、断面三角形を呈す。受部は丸くおさめ、底部平坦。外面底部2周ヘラ削り、中心部はヘラ切り未調整。

63は立ち上がりは短かく、大きく内傾し、受部は丸くおさめる。外面底部ヘラ切り未調整。

64は口径8.9cmと小型で、立ち上がりは短かく内傾し、受部からわずかに出る。受部は角張る。外面底部ヘラ切り未調整。

65は立ち上がりは短かく内傾し、受部は丸くおさめる。外面底部ヘラ切り後ナデを施す。

66は立ち上がりは極めて短かく内傾し、形態化し、受部から出ない。受部は丸くおさめる。外面底部ヘラ切り未調整。

67是有台杯で、高台は低く、底部端に付けられ、下端接地面は平坦。外面底部ナデ。

以上のものは、⑧(陰田A-2b類)に分類されるが、底部周辺2周削り、中心部はヘラ切り未調整のままで、ヘラ切り後ナデを施すものより後出的なもの(62)。⑨(陰田A-3類)底部ヘラ切り後ナデを施すもの(65)。⑩(陰田A-4類)底部ヘラ切り未調整のもの(63・64・66)で、このうち、64は口径8.9cmと小型である。⑪有台杯で、高台は底部端に付けられ、下端接地面は平坦。外面底部ナデ。に分類され、④から⑩・⑪へと流れを追うことができる。時期的にみると、⑧はヘラ切り未調整出現期で7世紀前葉。TK-217型式併行。⑫7世紀中葉。⑬、⑭7世紀後葉に位置付けられる。

(臺) 68・78・80

68は長頸壺の底部で、高台は八の字状に開き、下端接地面はほぼ平坦。底部ナデ。外面底部周辺2周の削り。

78は高台が付き、外面平行タタキ、内面同心円タタキ。

80は短頸壺でやや外反する口縁部をもつ。体部にカキ目。

以上、時期的にみると、68は7世紀後葉～末葉のものであろう。

#### (高杯) 69～76

69は長脚で、一条の浅い沈線を巡らす。透かしはない。

70・71は有蓋高杯で、70は低脚で、三角形透かしを三方に入れる。

72は低脚で透かしはない。

73は椀状の杯部をもつ無蓋高杯。脚部は低脚で、長方形透かしを一方に、もう一方の透かしは切れ目となる。脚端部外面に直立する面をもつ。

74は椀状の杯部をもつ無蓋高杯。脚部は低脚で、透かしは二方とも切れ目となる。

75は脚部は低脚で、透かしは三方とも切れ目となる。

76は脚部は低脚で、三角形透かしを二方に入れる。

以上のうち、73は時期的にみると、7世紀中葉。70・71は6世紀後葉頃のものであろう。

#### (提瓶) 77

77はやや外傾する筒状の口縁部をもち、把手は形骸化したボタン状のものを貼り付ける。外面肩部～胸部カキ目。底部平行タタキ。内面底部同心円タタキ。7世紀中葉頃のものであろう。

#### (疋) 79

79は胸部の破片で、肩部にボタン状のふくらみが付く。

以上、曲岡遺跡出土の須恵器は古墳時代後期（6世紀後半以降）～飛鳥時代に限定され、中でも7世紀代のものが、大半である。

### 3. その他

#### (土製支脚) 39～42

39は支脚部と尻尾部。

40は尻尾部は水平方向に延び、脚部は円柱状で、脚端部は八の字状に開く。

41は支脚部と尻尾部で、尻尾部は長めで、やや水平方向に延びる。二本の支脚部の開きは鈍い。削り後、指押え。

42は円柱状の脚部で、脚端部は八の字状に鈍く開き、接地面は平坦。底部は中空状に高く凹む。外面タテハケメ。内面削り。

#### (かまど) 43～47

43は口縁部～右側焚口部の破片で、底部接地面は平坦。体部外面タテハケメ。内面タテ方向の削り。

44は口縁部～右側庇部の破片。

45は口縁部～左側庇部の破片。庇部、体部ナデ、タテハケメ残る。

46は口縁部～右側庇部の破片。庇部外面ナデ、内面ヨコハケ。

47は左側焚口部の破片。外面体部上位ヨコハケ、中位タテハケメ、ナデ。内面上位タテハケメ、以下タテ方向の削り。

(すり鉢) 81

81は備前すり鉢の口縁部で、内傾する面をもつ。内面におろし目。

(土垂) 82

82は長径4.0cm、厚さ3.4cmの土垂。

(紡錘車) SI

SIは淡黄白色滑石製紡錘車で、長径4.8cm、厚さ2.4cmを測る。

## 第5章 おわりに

今年の夏は記録的な猛暑とかんばつに見舞われた。この影響は本遺跡の調査中にも如実に現われ、遺構検出も困難を極めた。遺構検出面や地山にはシートを被せたりして養生に努めたが、ひびわれが入り、思うに任せなかった。当然ながら、県内は言うに及ばず西日本各地の発掘調査現場の調査も大変であつただろうと思う。こよみの上では、そろそろ朝夕は初秋の涼風が吹くはずの8月22日も30度を越す猛暑であったが、この日、調査員の友定美保子さんが突然逝去された。つい先刻まで一緒に調査に携わっていたのに、余りにも突然で、しかも業中止であり残念でならない。本遺跡の現地調査終了まであと一息と言う時だった。

曲りなりにも、後を引き継ぎ本報告書をまとめることができたのも、友定さんのおかげと感謝しています。紙面をかりて友定美保子さんに深甚なる謝意を表すとともに、御冥福をお祈り申し上げます。

また、調査にあたって円滑な作業ができたのは、猛暑の中、発掘に参加していただいた方々の献身的な協力と、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターを始め、この調査にご協力いただいた方々のおかげであり、末筆ながら、これらの方々に感謝の意を表します。

# 遺物観察表

器種	土器番号	捕獲回数	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成度	色調	備考
弥生土器 壺	1	12	4	復口径15.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、外面に数条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ヨコハケ。	密。1～2mm径の石英点花。	良 好	淡茶褐色
弥生土器 壺	2	12	4	復口径14.6	口縁部～頸部破片。やや直立する複合口縁で、外面に輪幅直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。1～3mm径の白色砂粒含む。	良 好	淡黃茶色 B区
弥生土器 壺	3	12	4	復口径14.6	口縁部破片。口縁端部はわずかに膨張され、内傾する外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。白色砂粒わずかに含む。	良 好	淡茶褐色 B区
弥生土器 壺	4	12	4	復口径13.4	口縁部破片。口縁端部はわずかに膨張され、内傾する外面に3条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。	密。1mm径の白色砂粒わずかに含む。	良 好	暗黃茶色 B区
弥生土器 壺	5	12	4	復口径16.4	口縁部～頸部破片。口縁端部は上下に幅広く膨張され、大きく述べる外周に5条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。外表面端ヨコハケ。内面頸部以下ケズリ。	密。1～3mm径の石英点花。	良 好	淡橙白色
弥生土器 壺	6	12	4	復口径18.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、外面に7条以上の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。1mm径の石英点多く含む。	良 好	外面灰茶褐色 内面暗茶褐色
弥生土器 壺	7	12	4	復口径20.5	口縁部破片。外傾する複合口縁で、外面に4条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。1mm程度の白色砂粒含む。	普 通	内外面黄茶色 断面灰褐色 B区
弥生土器 壺	8	3	4	復口径16.8	口縁部破片。外傾する複合口縁で、外面に4条以上の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。外表面端タテハケ。内面頸部左方向ケズリ。	密。0.5～2mm径の長石・石英と、微細黒褐色砂粒を含む。	良 好	淡乳白色 B区
弥生土器 壺	9	3	4	復口径20.0	口縁部破片。やや外傾する複合口縁で、外面に10条の輪幅直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。	粗。1～2mm径の白色砂粒多量に含む。	良 好	黄褐色 B区
弥生土器 壺	10	12	4	復口径20.0	口縁部破片。外傾する複合口縁で、外面に12条の輪幅直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	粗。1～3mm径の白色砂粒を多く含む。	やや良	黄茶褐色 B区
弥生土器 壺	11	12	4	復口径15.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、頸部はやや角張る。外面に輪幅直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部右方向ケズリ。	密。1～3mm径の白色砂粒含む。	普 通	外面 暗黃茶色 断面 黑色 B区
弥生土器 壺	12	12	4	復口径14.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、外面に輪幅直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。1mm程度の白色砂粒少し含む。	良 好	外面 黑色 内面 茶褐色 断面 灰色
弥生土器 壺	13	12	4	復口径17.0	口縁部～頸部破片。直立する複合口縁で、外面にヘラ推直線文の後、横ナデを施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部右方向ケズリ。	密。微細砂粒含む。	良 好	外面 墨黒褐色 内面 白茶褐色
弥生土器 壺	14	12	4	復口径15.6	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、頸部は角張る。外面に波状文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。2mm径の石英わずかに含む。	良 好	外面 白黃茶色 内面 白棕色
赤土器 壺	15	12	4	復口径18.0	口縁部～頸部破片。やや外反弧形に外傾して立ち上がりの複合口縁で、上端は丸くおさめ、下端の腹は尖る。外面に輪幅直線文を施す。	内外面横ナデ。	密。1～2mm径の白色砂粒含む。	良 好	淡黃茶色 B区

器種	土器番号	捕回	回数	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
弥生土器 鼓形器台	16	12	4	復口径25.0 器高25.0 底径18.0	受部と脚台部を複合状 につくり、外面上に圓凹 線文を施さる。底部に 長方形の連じ孔を穿 ち、中程に3条のハラ 描直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。 外面底部上位にタチハ ケメ、脚台部横ナデ。 内面底部中程出脚仰 け目。下位以下右方 向ケズリ。	密。1～ 2mm径の 白色砂粒 混わずか に含む。	良 好	黄褐色	内外圓 朱塗り B区
弥生土器 鼓形器台	17	3	4	復口径15.6 12		外面横ナデ。	密。0.5～ 2mm径の 長石、石英 含む。	良 好	外 面 淡橙色 内 面 淡橙黃 色	B区
弥生土器 高杯	18	13	4	復底径10.0	脚台部破片。八の字状 に開き、底面は角張 り、水平方に突出す る棱をもつ。	脚台部内外面横ナデ。 脚部内面ケズリ。	粗。1～ 4mm径の 白色砂粒 多量に含 む。	良 好	淡橙黃色	B区
弥生土器 脚部	19	13	4	底 径18.0	脚台部破片。大きく八 の字状に開き脚台部は 複合状を呈し、外面上 に3条の凹線文を施す。	脚台部内外面横ナデ。 内面ケズリ。	密。1～ 2mm径の 石英 点在。	良 好	淡黃茶白色	
土 器 甕	20	13	4	復口径19.0	口縁部破片。直立して 立ち上がり、端部がわ ずかに外方に屈曲する 複合口縁で、器壁は薄 い。	内外面横ナデ。	密。1mm 径の白色 砂粒を 混わずか に含む。	良 好	外 面 粉色 内 面 淡黃茶色	B区
土 器 甕	21	13	4	復口径14.0	口縁部～頸部破片。や や外反気味に外傾する 複合口縁で、端部は尖 がる。	口縁部内外面横ナデ。 内面底部ケズリ。	密。	良 好	淡黃茶色	B区
土 器 甕	22	13	4	復口径13.6	口縁部～頸部破片。や や外反気味に外傾する 複合口縁で、上端は 角張り、やや外方に肥 厚する。下端は外方に 鋭く突出する。	口縁部内外面横ナデ。 内面底部ケズリ。	粗。1mm 径の白色 砂粒を多 く含む。	普 通	淡黃褐色	B区
土 器 甕	23	13	4	復口径16.0	口縁部～頸部破片。外 傾する複合口縁で、上 端は角張り、下端の 棱は外方に鋭く突出す る。	口縁部内外面横ナデ。 内面頸部ケズリ。	密。微細 砂粒含 む。	良 好	茶褐色	B区
土 器 甕	24	13	4	復口径10.2	口縁部～頸部破片。内 傾する短かい複合口縁 で、上端は肥厚し、下 端は外方に突出する。	口縁部内外面横ナデ。 内面頸部からケズリ。	密。	良 好	淡黃茶色	B区
土 器 甕	25	13	5	復口径20.0	口縁部破片。ほぼ直立 する短かい化粧した複 合口縁を呈し、端部は 尖りがり気味。	内外面横ナデ。	粗。1～ 2mm径の 白色砂粒 多く含 む。	普 通	内・外 面 淡黃茶 断面 黄灰褐色	B区
土 器 甕	26	3	13	5 复口径23.8	口縁部～肩部破片。外 反する単純口縁で、端 部は尖りがり気味。頸部 は「く」の字状に屈曲 する。	口縁部内外面横ナデ。 外部肩部以下ヨコハ ケ。内面頸部以下斜め 右上方向ケズリ。	密。1～ 2mm径の 白色砂粒 多く含 む。	良 好	黄茶色	外 面 朱塗り B区
土 器 甕	27	13	5	復口径24.0	口縁部～肩部破片。外 反する単純口縁で、端 部は尖りがり気味。頸部 は「く」の字状に屈曲 する。	口縁部内外面横ナデ。 内面頸部以下左方向ケ ズリ。	密。1～ 2mm径の 白色砂粒 含む。	良 好	黄茶色	B区
土 器 甕	28	3	13	5 复口径20.8	口縁部～頸部破片。外 反する単純口縁で、端 部は尖りがり気味。頸部 は「く」の字状に屈曲 する。	口縁部内外面横ナデ。 外側頸部ナナメハゲ。 内面頸部以下斜め右上 方向ケズリ。	粗。1～ 3mm径の 白色砂粒 含む。	良 好	内・外 面 淡橙黃 褐色 断面 淡橙黃色	B区
土 器 甕	29	14	5	復口径19.6	口縁部～肩部破片。外 反する単純口縁で、端 部はやや角張る。頸部 は「く」の字状に屈曲 する。	口縁部内外面横ナデ。 外面肩部以下タチハケ メ。内面頸部以下ケズ リ。	密。微細 砂粒含 む。	良 好	淡黃茶色	B区
土 器 甕	30	14	5	復口径20.0	口縁部～肩部破片。外 反する単純口縁で、端 部は丸味をもつ。頸部 は「く」の字状に屈曲 する。	口縁部内外面横ナデ。 内面頸部以下左方向ケ ズリ。	密。1mm 径の白色 砂粒含 む。	良 好	外 面 淡褐色 内 面 淡黃茶色	外 面 朱塗り B区

器種	土器番号	縦径	横径	高さ	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	施保成存	色調	備考
土 節 墓	31	14	5		復口径27.0	口縁部～肩部破片。外側する複合口縁で、腹部は尖り気味。頭部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外側する複合口縁で、腹部以下タテハケメ、ナナメハケメ。内面頭部以下左方向ケズリ。	密。1～3mm程の白色砂粒含む。	良 好	暗黄茶色	外面スス付着B区
土 節 墓	32	14	5		復口径21.5	口縁部～胸部破片。外側する複合口縁で、腹部はやや角張る。頭部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外側する複合口縁で、腹部以下タテハケメ。内面頭部以下斜め右上方ケズリ。	粗。1～3mm程の白色砂粒含む。	良 好	外・断面 黄茶褐色 内面 濃茶褐色	B区
土 節 墓	33	14	5		復口径21.0	口縁部～胸部破片。外側する複合口縁で、腹部は尖味をもつ。頭部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外側する複合口縁で、腹部以下タテハケメ。内面頭部以下右方向ケズリ。	密。1～3mm程の白色砂粒含む。	良 好	暗黄茶色	外西スス付着B区
土 節 墓	34	14	5		復口径23.6	口縁部～肩部破片。外側する複合口縁で、腹部は尖がる。頭部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外側する複合口縁で、腹部以下タテハケメ。内面頭部以下右方向ケズリ。	粗。1～3mm程の白色砂粒多量に含む。	良 好	暗黄色	外面スス付着B区
土 節 墓 有台杯	35	14	5		復底径11.0	高台破片。高台は低く、接地面は平坦。腹に平坦面に出す。	内外面回転横ナデ。	密。微細砂粒含む。	普 遍	淡橙黄色	赤色強彩残るB区
土 節 墓 高杯	36	14	5		復底径8.2	脚部断片。「八の字」状で大きく開く脚台部で、腹面に2条の浅い沈線を施す。	外面タテハケメ、ナダ。内面柱状部凹り目。脚台部ナナメハケメ。	密。1～2mm程の白色砂粒含む。	1 普 遍	内・外面 橙黄色 断面 灰黄色	B区
土 節 墓 把手	37	3	5			牛角状の把手。	ケズリ後ナデ。			暗黄色	B区
土 節 墓 把手	38	14	5			牛角状の把手。	ケズリ後ナデ。			暗黄褐色	B区
土製支脚	39	15	5			尻尾部、脚部欠損。	ナデ、指押え。	密。1～3mm程の白色砂粒含む。	良 好	暗黄褐色	B区
土製支脚	40	3	2	高さ 16.9	復底径12.8	尻尾部は水平方向に延び、腹部は円柱状で、八の字状に大きく開く、脚部へ続く。	ケズリ後ナデ、指押え。	密。1～2mm程の白色砂粒含む。	良 好	黄茶色	B区
土製支脚	41	3	6			尻尾部は長めで、やや水平方向に延びる。二本の支脚部の開きは無い。	ケズリ後ナデ。	密。1～2mm程の白色砂粒含む。	良 好	帶黃色 断面 濃黃灰褐色	B区
土製支脚	42	15	6		復底径12.8	脚部はほぼ円柱状で、八の字状に強く開く尻部は中空状に高くほむ。	外面タテハケメ。内面ケズリ。脚端部内外面ナデ。	密。1～4mm程の白色砂粒含む。	良 好	内・外面 淡黄褐色 断面 黄褐色～灰褐色	B区
かまど	43	3	1	高さ 38.4		口縁部～右側焚口部の破片。底部接地面は平坦。	口縁部内外面ナデ。体部外側タテハケメ。内面タテ方向のケズリ。	密。1～3mm程の白色砂粒含む。 6mm程程度の大粒点在。	良 好	明椎茶色	内面口縁部スス付着B区
かまど	44	17	6			口縁部～右側底部の破片。	口縁部内外面ナデ。底部ナデ。	密。1～3mm程の白色砂粒含む。	良 好	淡黄茶色	B区
かまど	45	17	6			口縁部～左側底部の破片。	口縁部内外面ナデ。底部、体部ナデ、タテハケメ。	密。1～4mm程の白色砂粒含む。	良 好	淡橙色 断面 灰茶色	B区
かまど	46	3	6			口縁部～右側底部の破片。	口縁部内外面ナデ。外側底部ナデ、内面ヨコハケ。	密。1～4mm程の異石・石英含む。	良 好	外面 明茶色 内面 暗茶褐色	B区
かまど	47	17	6			左側焚口部の破片。	外側体部上位ヨコハケ、中位以下タテハケメ、ナダ。内面上位タテハケメ、以下タテ方向のケズリ。	密。1～4mm程の砂粒含む。	良 好	外面 赤茶色 内面 暗赤茶色	B区

器種	土器番号	縦	横	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
須恵器 杯蓋	48	18	6	復口径12.8	杯蓋の破片。口縁部は内凹し、端部は薄く丸味をもつ。口縁部と天井部の境は2条の浅い丸線で区別される。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部三周へラ削り、中心部ナデ。内面天井部は仕上げナデ。	密。1mm径の白色砂粒含む。	良 好	濃灰色	B区
須恵器 杯蓋	49	18	6	口 径13.7	完形品。口縁部は内凹で、端部は薄く丸味をもつ。口縁部と天井部の境は強めのナゲにより浅い棱をもつ。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部二周へラ削り、中心部ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1~3mm径の白色砂粒含む。	良 好	灰色	外面天井部へラ記号B区
須恵器 杯蓋	50	3	18	復口径13.1	杯蓋の破片。口縁部は内凹し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境ははっきりしない。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部二周へラ削り、中心部ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1mm径の白色砂粒含む。	良 好	灰色	B区
須恵器 杯蓋	51	3	18	復口径12.9	杯蓋の破片。口縁部は内凹気味で、端部はやや肥厚し、丸味をもつ。口縁部と天井部の境ははっきりしない。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部へラ削り後、ナゲ。内面天井部仕上げナデ。	密。1~3mm径の白色砂粒含む。	良 好	灰色	外面天井部へラ記号B区
須恵器 杯蓋	52	3	18	復口径11.4	杯蓋の破片。口縁部は大きめに内凹し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境ははっきりしない。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部へラ削り後、ナゲ。内面天井部仕上げナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒含む。	良 好	灰色	外面天井部へラ記号B区
須恵器 杯蓋	53	18	7	復口径9.8	杯蓋の破片。口縁部は内凹し、端部は丸くおさめる。口縁部と天井部の境ははっきりしない。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部へラ削り未確認。内面天井部仕上げナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒含む。	良 好	濃灰色	内面天井部へラ記号B区
須恵器 杯蓋	54	18	7	復口径12.3	杯蓋の破片。口縁部は内凹し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境ははっきりしない。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部へラ削り後ナゲ。内面天井部仕上げナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒含む。	良 好	濃灰色	B区
須恵器 杯蓋	55	18	7	復口径9.6	杯蓋の破片。口縁部は内凹し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境ははっきりしない。	口縁部内外面回転構ナデ。外面天井部へラ削り未確認。内面天井部仕上げナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒含む。	良 好	濃灰色	B区
須恵器 杯蓋	56	18	7	口 径9.3	完形品。宝珠状のつまみがつき、かえりは口縁部からわずかに出る。	外外面回転構ナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒わざかに含む。	良 好	外面濃灰色 内面灰色	B区
須恵器 杯蓋	57	3	18	復口径10.2	杯蓋の破片。寶珠状のつまみがつき、かえりは口縁部からわずかに出る。	外面回転構ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒基盤を含む。	良 好	外面濃灰色 内・断面灰色	外面縦 B区
須恵器 杯蓋	58	18	7		杯蓋の破片。乳頭状のつまみがつく。	外面天井部三周へラ削り。内面天井部仕上げナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良 好	濃灰色	B区
須恵器 杯蓋	59	18	7	復口径10.0	蓋の破片。	内外面回転構ナデ。	密。微細砂粒含む。	良 好	明灰色	B区
須恵器 杯身	60	18	7	口 径10.6	完形品。立ち上がりは内傾し、受部は肥厚し丸い。	口縁部内外面回転構ナデ。底部彫整不明。内面天井部仕上げナデ。	密。1~2mm径の砂粒含む。	良 好	外面灰黄色 内面灰色	内面底 部へラ 記号C区
須恵器 杯身	61	18	8	復口径12.2	杯身の破片。立ち上がりは内傾し、受部は丸くおさめる。	内外面回転構ナデ。	密。1mm径の白色砂粒わざかに含む。	良 好	外面灰色 内・断面灰褐色	B区
須恵器 杯身	62	3	18	口 径10.5	立ち上がりは短く、内傾し、断面三角形を呈す。受部は壁部は薄く、丸くおさめる。	口縁部内外面回転構ナデ。外面底部へラ削り。内面底部中央仕上げナデ。	粗。1~7mm径の白色砂粒含む。	良 好	外面濃灰色 内・断面灰色	B区

器種	土器番号	種別	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
須恵器 杯身	63	18	8	復口径11.6	杯身の破片。立ち上がりは短く、大きく内傾し、受部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面部底部へラ切り未調整。内面部底部仕上げナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒含む。	良 好	灰色	B区	
須恵器 杯身	64	18	8	復口径8.9	杯身の破片。立ち上がりは短く、内傾し、受部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面部底部へラ切り未調整。内面部底部仕上げナデ。	密。1mm径の白色砂粒含む。	良 好	灰色	B区	
須恵器 杯身	65	18	8	口 径10.6	立ち上がりは短く、内傾し、受部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面部底部へラ切り後ナデ。内面部底部仕上げナデ。	密。1~3mm径の白色砂粒含む。	普通	濃灰色 断面 濃灰色~茶褐色	B区	
須恵器 杯身	66	18	8	復口径12.4	杯身の破片。立ち上がりは漸化して短く、内傾し、受部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面部底部へラ切り未調整。内面部底部仕上げナデ。	密。1~2mm径の白色砂粒含む。	良 好	濃灰色	B区	
須恵器 有台杯	67	18	8	復口径11.8 復底径7.8 器 高4.4	口縁部は内窓気味に外傾して立ち上がり、脚部は丸くおさめる。高台は低く、底部業に付けられ、下端膨ら地面は平坦。	口縁部内外面回転横ナデ。外面部底部仕上げナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良 好	濃灰色	C区	
須恵器 長頸壺	68	18	8	底 径7.2	底部、高台は「八の字」状に明き、下端接地面はほぼ平坦。	杯部回転横ナデ。ヘラ削り。底部ナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良 好	灰色	B区	
須恵器 高杯	69	18	8		長脚で、一条の長い沈線を這らす。窓かしはない。	外面部回転横ナデ。	密。微細砂粒含む。	良 好	濃灰色	B区	
須恵器 有蓋高杯	70	3	19	8	口 径11.1 復底径10.1 器 高10.0	立ち上がりは内傾し、受部は丸くおさめる。脚部は低脚で、三角形透かしを三方に入れる。	外面部以下回転横ナデ。内面部杯底部仕上げナデ。	密。1~2mm径の砂粒含む。	良 好	外面 濃灰色 内面 灰色	B区
須恵器 有蓋高杯	71	19	8	口 径10.5	杯部。立ち上がりは内傾し、受部は丸い。	外面部回転横ナデ。内面部杯底部仕上げナデ。	粗。1~2mm径の白色砂粒多く含む。	良 好	灰色	外面灰 B区	
須恵器 高杯	72	3	19	8	底 径9.8	杯底部へ脚部。低脚で、窓かしはない。	外面部回転横ナデ。内面部杯底部仕上げナデ。	密。1~3mm径の白色砂粒と、1~2mm径の黒雲母含む。	良 好		B区
須恵器 無蓋高杯	73	19	8	復口径15.0 底 径8.4 器 高9.4	杯部は輪状で、窓部は丸くおさめる。脚部は低脚で、長方形透かしを二方に、もう一方の透かしは切れ目状となる。脚部外側に直立する面をもつ。	外面部回転横ナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良 好	濃灰色	B区	
須恵器 高杯	74	19	8	底 径9.8	杯底部へ脚部。杯部は低脚で、脚部は低脚で、透かしは二方とも切れ目となる。脚部外側に内傾する面をもつ。	外面部回転横ナデ。	密。白色微細砂粒わずかに含む。	良 好	灰色	B区	
須恵器 高杯	75	19	9	底 径9.8	杯底部へ脚部。		密。	良 好	灰色	B区	
須恵器 高杯	76	19	9	底 径11.2	脚部。脚部は低脚で、三角形透かしを二方に入れる。脚部外側に内傾する面をもつ。	外面部回転横ナデ。	密。	良 好	濃灰色	B区	
須恵器 提瓶	77	3	19	9	復口径12.0 最大幅21.4 高 8.26.4	やや外傾する笠状の口縁部をもち、把手は形質化したボタン状のものを貼り付ける。	口縁部内外面回転横ナデ。外面部筒窓へ脚部カ目、底部平行タクナキ。内面部同心円タクナキ。	密。微細砂粒多く含む。	良 好	外面灰褐色 内面 灰色	B区

器種	土器番号	補圖	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成存	色調	備考
須恵器 壺	78	19	9	腹高台径 10.0	底部。高台は「八の字」状に開き、下端接地面は平坦。	外面ナデ後、平行タタキ目。底盤外面タタキ後、仕上げナデ後、内面ナデ後、同心円タタキ。	密。1mm 径の白色 砂粒含む。	良好	外面 内面 灰青色 淡灰色	C区
須恵器 壺	79	20	9	胴部径12.2	胴部破片。肩部にボタン状のふくらみが付く。	外面調整不明。	ち密。	普通	濃灰 断面 茶褐色	灰褐色 B区
須恵器 短頸壺	80	20	9	復口徑6.0	口縁部～胴部破片。やや外反する口縁部。	口縁部内外面回転横ナ ギ。 体部カキ目。	密。1mm 径の白色 砂粒含む。	普通	外面 内面 灰色 断面 灰茶色	B区
備前 すり鉢	81	20	9	復口徑34.0	口縁部破片。内傾する 面をもつ。	外面回転横ナギ。 内面におろし目。	密。	良好		B区
土垂	82	20	9	最大長4.0 最大幅4.0 最大厚3.4					黄茶褐色	B区
器種 石器 番号				法量(cm)	形態上の特徴		石材		色調	備考
紡錘車	S 1	20	9	最大長4.8 最大幅4.7 最大厚2.4					淡黃白色	

# 図 版

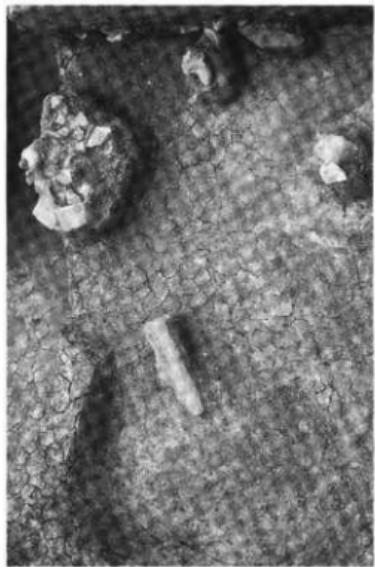
図版 1



調査区 遠景（南から）



B区 SS-02 掘下中（東から）



B区 遺物出土状況・須恵器72号か（北から）



B区 SS-02 遺物出土状況・かまど43（北西から）

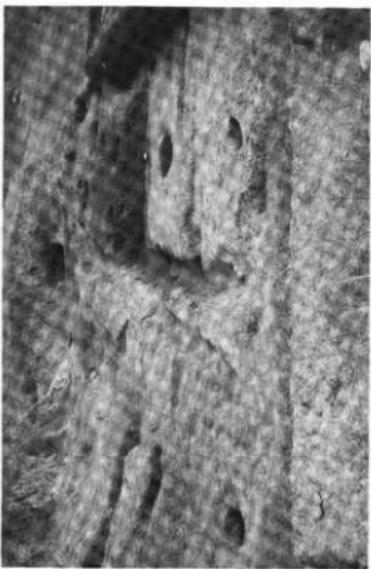
図版2



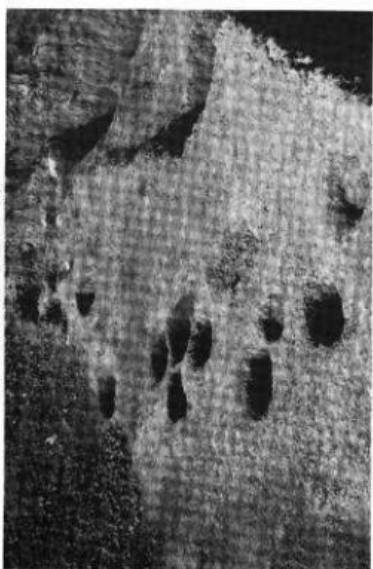
B区 SS-03 遺物出土状況・土製支脚40(ほか)(北東から)



B区 完損状況(東から)



B区 完損状況(北西から)



C区 ビット群P8~P15(北から)

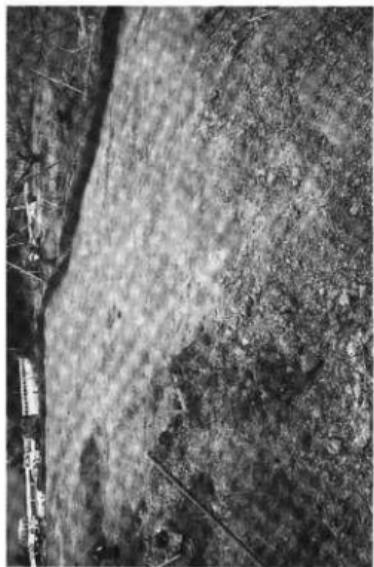
### 図版 3



D区 SS-06 完掘状況（北西から）



D区 SS-06 完掘状況（北西から）

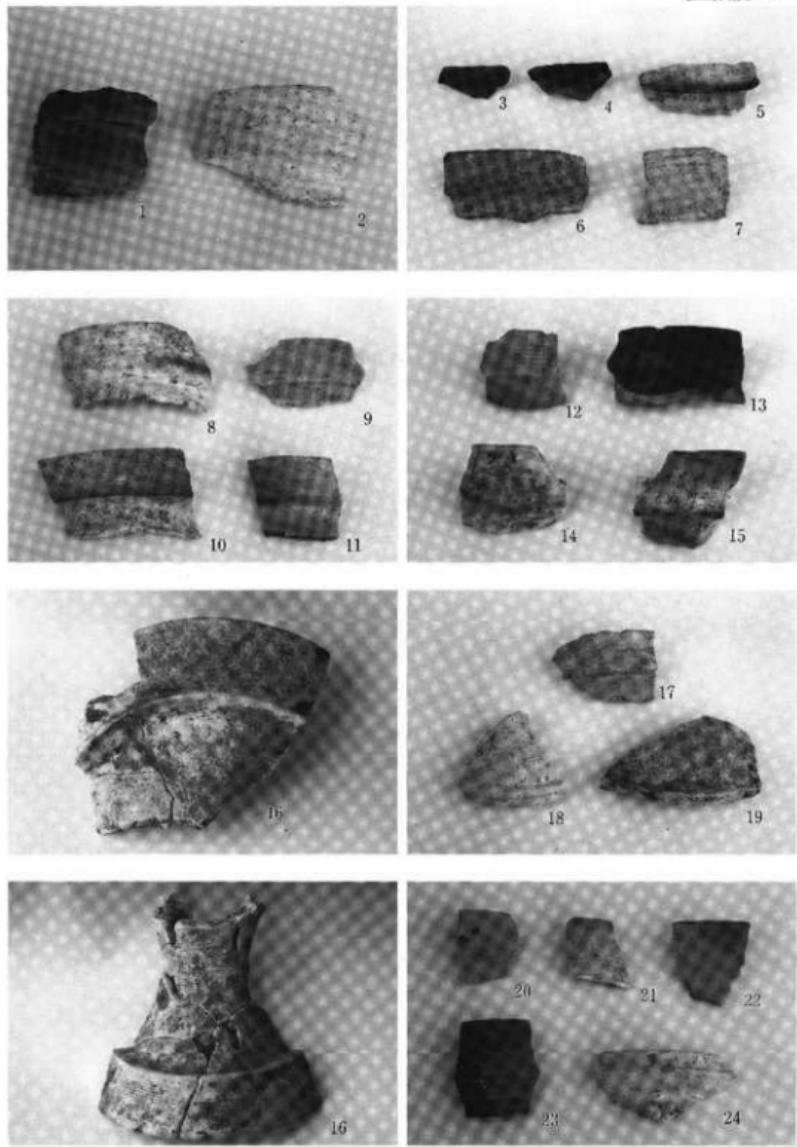


A区 完掘状況（南から）

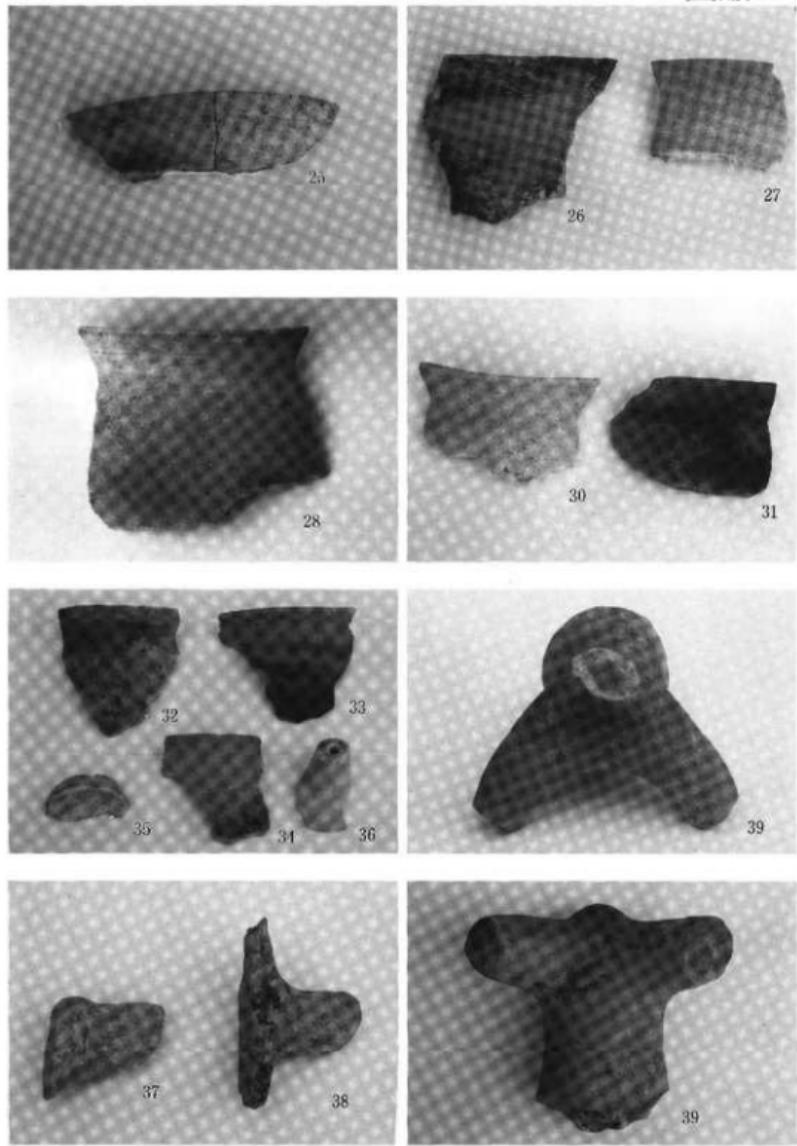


C区 完掘状況（南東から）

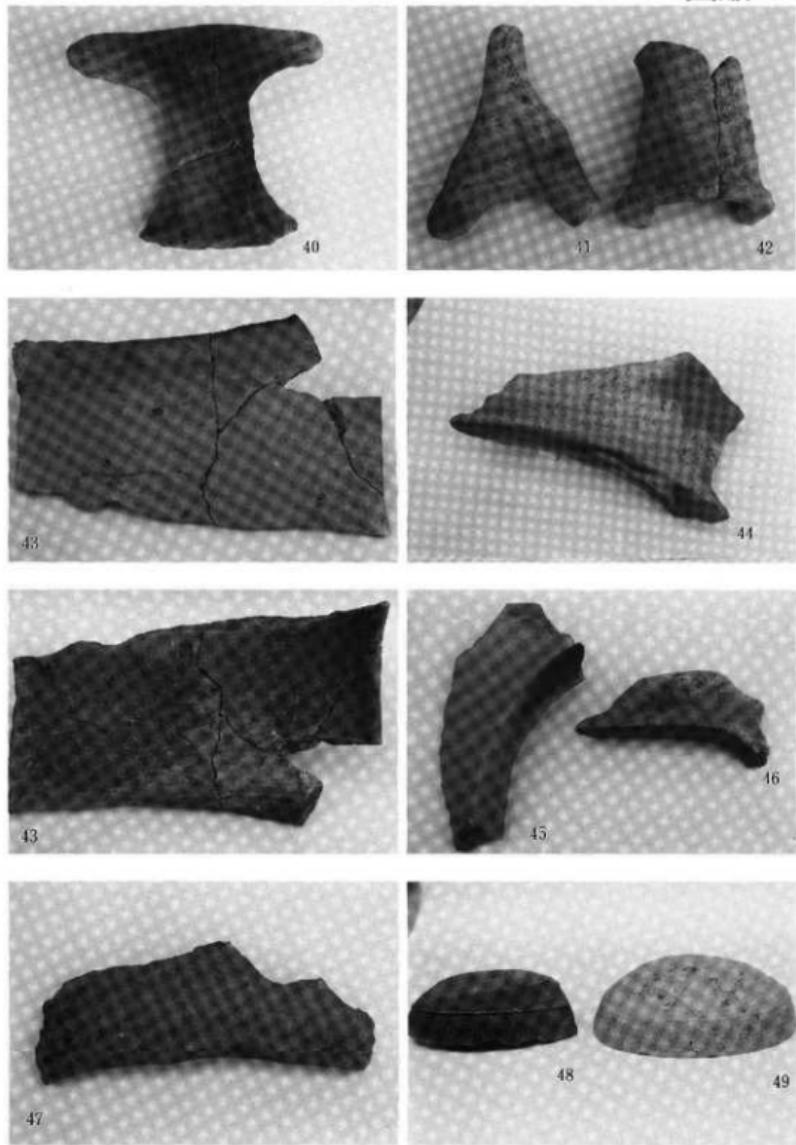
図版 4



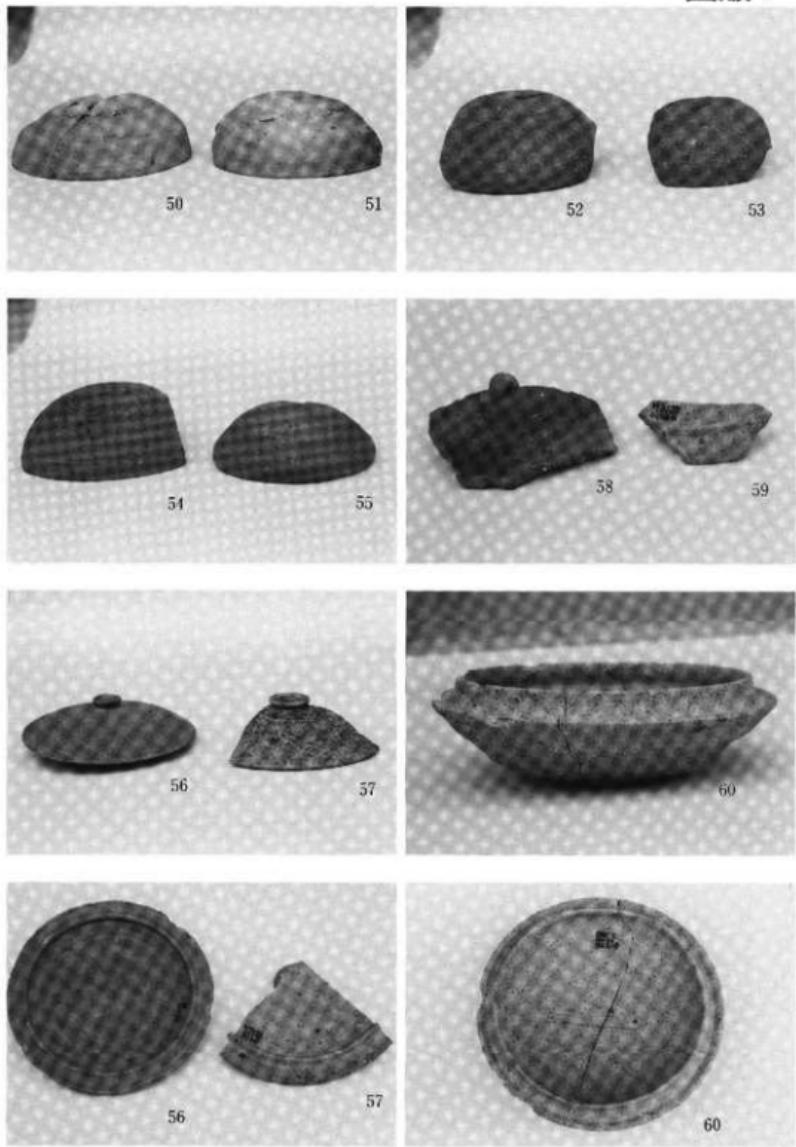
図版 5



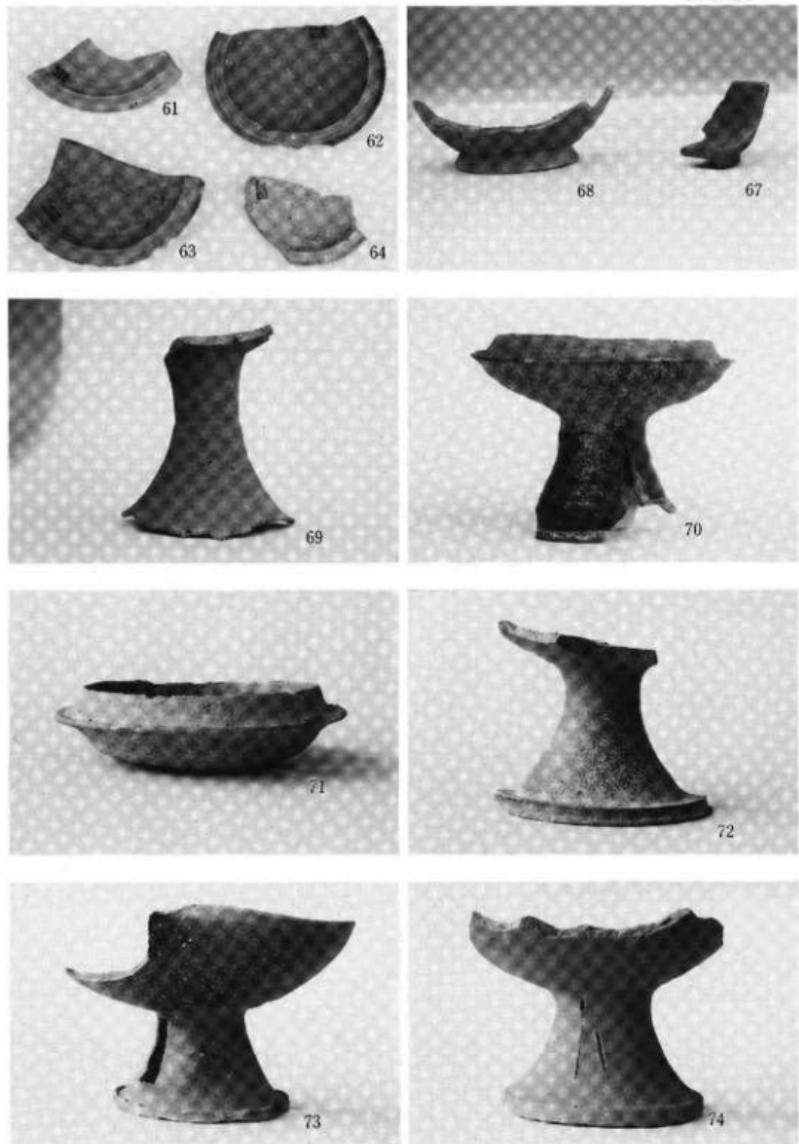
図版 6



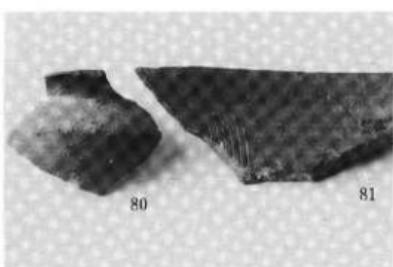
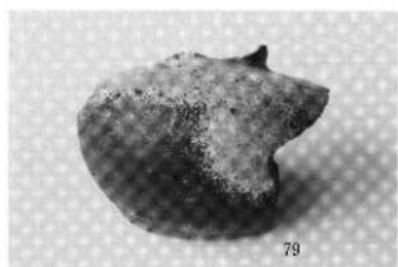
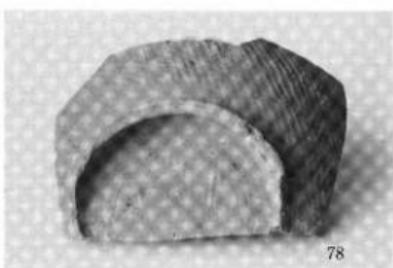
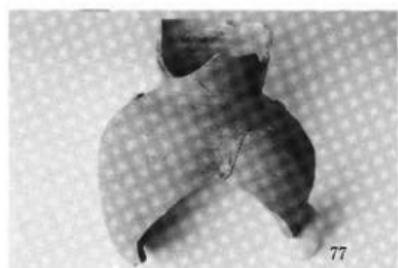
図版 7



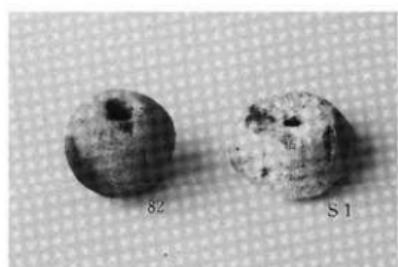
図版 8



図版 9



81



S 1

平成 7 年 3 月印刷  
平成 7 年 3 月発行

**北条町埋蔵文化財報告書17  
曲第1遺跡(岡遺跡)発掘調査報告書第1集**

編集 烏取県東伯郡北条町土下112  
発行 北条町教育委員会

印刷 勝美印刷株式会社鳥取支店  
製本 烏取県東伯郡羽合町長瀬818-1